交差する光たち

古河　渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
交差する光たち

【Ｎコード】
Ｎ１２８６Ｍ

【作者名】
古河　渚

【あらすじ】
なぜ彼らは出会ってしまったのだろうか。それは偶然ではなくて必然なのだろう。
出口のないトンネルを見つけた夫婦、霊能者から不思議な未来を告げられた夫婦、二組の夫婦が織りなす不思議なスピリチュアルな話です。
後半驚くべき展開が待っていますので、ぜひ楽しんでください。

1　トンネル

1　トンネル

「知ってるかい、あのトンネルには出口がないんだよ」
俺は得意げな顔で、恭子の眼をのぞき込んで言った。
「ねえ、ずっと気が付かなかったんだけど、俺たちが使うこの上下線と、隣を走る特急専用の上下線にはトンネルの出口があるんだ。でも、あの線路にはないんだよ」
俺と恭子は朝の出勤のホームで、登り東京方面行きの電車を待っていた。この駅は都内に通勤通学するには便利なロケーションにある。そのために、駅前にはかなり大きなマンションが立ち並らび、またその地域に隣接して一戸建てを中心とした住宅地がいくつか存在している。しかし、幸いなことに街の周辺には緑地が多く残っていて、街自体が小高い丘陵地帯に囲まれていた。トンネルはその丘陵の一個を貫いているのだ。
俺たちは二年前に結婚して、この街に住むようになった。同じ大学だった関係で学生時代に知り合って付き合いはじめ、同じ広告関係の会社に勤めるという離れ業を成功させた。社内で恋愛を進行させて結婚した俺たちは、二人の貯金と住宅ローンを使って２ＬＤＫのマンションを買った。部署は違うけれど同じ会社の同じビルに行く俺たちは、帰宅は別でも朝は同じ電車で通勤している。
「えっ、本当なの。ねえ、どうしてそれが判ったの？」
と恭子が少し不思議そうな顔で尋ねた。
「この間、外の景色をよく見ながらトンネルに入った時さ。そのとき、隣の線路は確かにトンネルの入り口に消えてったんだ。でも出る時に観察したら、そこはトンネルの出口どころか、その線路自体が消えていたんだ。入り口側には五個のトンネルがあるのに、出口では四個しかないんだよ」

と俺はこの新しい発見を得意げに話した。
「変ねえ、みんな気がつかないのかなあ？」
「ああ、みんな本や新聞を読んだり携帯に夢中になっていて、隣の線路のことなんか気にもとめないんだよ。ねえ、俺の計測では列車がトンネルを抜けるのに約５０秒かかることが判ったんだ。時速７０ｋｍくらいだすると秒速２０ｍくらいになるから、だからトンネルの長さは約１ｋｍもあるんだよ。だからその間で隣のトンネルは閉鎖されていて、つまり中で終わってるんじゃないかと思うんだ」
と俺は言った。
放送が、まもなく上り快速電車が一番ホームに入ってくることを告げていた。一番ホームは東京方面に向かうホームだった。
「変よー、それ。この間、ほらつい二週間くらい前に酒井さんのところに遊びにいったじゃない。あのとき、詩織と一緒にベランダから景色をながめて話をしたのよ。そのとき、この駅や線路やトンネルが見えていたんだけど、彼女が奇妙な話をしたのよ」
「うん、たしかに二週間くらい前だったな」
「詩織の話では、もう終電も無くなるころの深夜の一時か二時くらいに、灯りを煌煌（こうこう）と灯した列車が来るんだって、彼女それを初めて見たときブルートレインみたいな夜行列車かなって思ったそうよ。でも車両が三両くらいで、短くって変だなって…。それに、そんな深夜に灯りを煌煌と灯しているのに、人が乗ってるような感じがしなかったって…」
彼女は少し首をかしげて、何か腑に落ちない点があるかのように言った。
「つまり、その列車はあのトンネルに入っていくのかい？」
と俺は尋ねた。
「そうなのよ。詩織はその列車が不思議だから、あるとき偶然それが通ったときに、ベランダに出てよく観察したらしいの、そうしたら一番左のトンネルに入っていったんだって…」

「えーと、ごめんなさい。あの、立ち聞きするつもりじゃなかったのよ。ただ、偶然耳に入ってしまったものですから…、あなたたち、あのトンネルに興味があるのかしら？」
振り返ると、俺たちの後ろに品に良い五十歳くらいの婦人が立っていた。縁に紺の帯が付いたピンクのフレアスカートが通勤にはそぐわない印象を与えている。
「あ、はい、私たち、あのトンネルに興味があるんです。何かご存知なんですか？」
妻も婦人のいでたちに納得できないのか不思議そうな顔で応対した。
「他の方に聞こえないようにあまり大きな声ではお話できないのと、あなた方が他の人たちに話さないと約束できるのでしたら、お話しようと思うのですが」
と婦人は少し声をひそめて俺等に言った。
「お話には大変興味があるのですが、電車内はかなり込みますし、隣の人に聞こえないという訳にはいかないのではないでしょうか」
俺がそう答えると、婦人はそのとおり、というように大きくうなずいた。
「そのとおりですわ。もしお話しをするのであれば、電車には乗らずにあそこのホームの端で人に聞かれないようにしなければ…」
「でも、もうすぐ電車も来ますし、私たち、会社に遅れるってこともできないので、また偶然お会いしたときにでも聞かせていただければ…」と恭子が言った。
恭子の言い分はもっともだと思った。こんな訳のわからないことで、知らない人物と奇妙な話題について時間を費やすほど暇ではないのだ。
「残念ですわ。もう二度とお会いすることもないのですから」
婦人の顔には本当に残念でたまらないという様子が見て取れた。
「恭子、君先に行ってくれよ。僕はこの方の話を聞いてからすぐに後を追いかけるから。」

と俺は妻の方を振りかえって言った。いつも乗っている快速電車はもうホームにすべりこんできていて、速度を落として停止する寸前だった。

「誠ちゃん…、いいの？　私先に行くからね」

妻の言い方には多少の怒気が含まれていたが、俺はどうしてもトンネルの話を聞きたかった。ここで十分ぐらい話を聞いたって電車二本分くらいだ。フレックスの基準時間に遅れたってたいしたことにはならないし、今日は朝一番の会議も無かったはずだ。妻が上りの通勤快速に吸いこまれると、下り側の人の数はとても少なくてホームは閑散とした。俺と奇妙ないでたちの婦人とは、さらに人気のないホームの端に移動した。

「ここならば人目を気にしないで話せますわね。そうそう、それで、あの線路は廃線なんですのよ。ですから普通の意味での列車は走らないんですの」

と婦人は言った。

「廃線て？　あのトンネルの出口はどうなってるんですか？」

「あのトンネルは今から三十年くらい前に中で崩落して閉鎖されたのよ。そのころは出口もあって、もちろん線路もあったの。でも、その後の住宅建設で出口側は完全に埋められて、線路も外されて宅地になったのよ」

「じゃー、なんで入り口側が残っているんですか？」

「今も、そこを通過する列車があるからなのよ」

「えっ、出口が無いのに？…、もしかして、あのトンネルの中に電車の車庫かなんかが在るんですか？」

俺はかなり大きな声を上げていたのかもしれない。

「そうね、鉄道関係のほとんどの人があの中に車庫があると思っているわ。でも、車庫はないけれど列車は通過するのよ」

「通過って？　一体どこに行くんですか？」

「過去よ」

その日の午前中に社内の別の部署にいる恭子に連絡して、昼食は近くの公園で、二人で食べることにした。公園に仕出し弁当を売りにくるのでそれを買った。俺は和風ハンバーグ弁当で彼女はサンドイッチだ。

「ねえ、あの人どんな話をしたのよ？」

と恭子は尋ねた。

「それなんだけど、信じられないような話なんだ。いいかい、これから話すことは誰にもしゃべってはいけないんだ」

「えー、私会社の女の子に、今朝変なおばさんに声かけられたって言っちゃたわよ。トンネルの話も」

「誰も覚えてないさ。もし何か聞かれたら覚えてないってしらばっくれればいいよ。まあ、それはいいとして、その御婦人の話だけど、トンネルには出口がないってことと、深夜に列車がくるというのは本当らしい」

と俺は言った。

「何よそれ、どういうことなの？」

俺は途中のコンビニで買ったビールのプルリングをむしり取って、一口飲んだ。

「その列車は毎日運行されるわけではなくて不定期に、まあ、たまに走るらしいんだ。しかも列車の行き先は乗客の『過去』だという話だ」

「過去ってなによ…、ねえ、あなた昼真っから飲んでて大丈夫なの？」と彼女は大きな声を上げた。

「まあ大丈夫だよ。それにビールでも飲んで酔ったいきおいで話さなきゃだめなくらい奇妙なんだよ。いいかい、その列車に乗っているのはたったの一人で、その列車は乗客が行かなくてはならない過去で停車する」

「馬鹿馬鹿しい話だわ。それで過去に行ってしまった乗客は帰ってこれるのかしら？もしかして、この文明社会でも多くのの人が失踪するのって、これが原因て訳じゃないでしょうね」

恭子はイラついているように見えた。彼女は基本的にはこのような不合理な話がきらいなのだ。霊魂とかスピリチュアルとかそのような話にはあまり興味がない。でも俺はそういう話には結構興味があった。

「もちろん乗客は帰ってくるらしい。でも、あのご婦人の話で重要なのはここからなんだ」

俺はため息をついた。

「どうしたのよ。何か気になることでも言われたの？」

「ああ、あのご婦人はこの話は誰にも言わないこと。そして、この話を聞いた人は必ずあの列車に乗ることになるって言ったんだ。いつ乗ることになるのかはわからないらしいけど」

「なによそれ、それって脅しじゃない。あなた、お金なんか要求されなかったわよね？」

恭子の怒りは頂点に達しそうだった。

「それが、気が付いたらその最後の言葉を残して消えていたんだ。もし、過去に行きたくなったならば、三駅下ったところにある神社に夜中の十二時ちょうどに行けっていう話しを残してね。なんでもその神社は駅を降りて五分くらいのところにあるらしいんだけど」

「そんな話もう忘れましょうよ。その話のこと考えていると、きっと運が悪くなるわよ。ねえ…、もうその話私に聞かせないでくれる」

恭子はもう聞きたくないというように首をふり、その後、俺たちは各々の職場に戻った。そして家に帰った後もお互いにこの話題には触れなかった。

2　テニススクール

2　テニススクール

土曜日の朝一番で汗を流すのは気持ちが良かった。もうこのテニススクールに行き始めて半年がたち、同じ年頃の女友達も何人かできた。大学時代にテニスとスキーのサークルに入っていたから全くの初心者ではなくて、スクールのクラス分けテストでも一応フォアハンドは打てたし、ボレーもなんとか相手コートに返ったから、中級に滑り込むことができた。課題はとにかくバックハンドがすごく下手だということにつきる。

私のクラスには、土曜日の朝一番だからなのか平日のスクールを闊歩（かっぽ）しているオバ様たちはいなくて、中年でお腹が出てきたたぶんサラリーマンのオジ様たちと、二十台後半から三十台前半の魅力的な女たち、つまり私を含めて四人の女性がいた。私たち四人はすぐに打ち解けて、スクールが終わると隣の建物にあるスターバックスでお茶をすることが多くなった。その日は女性二人が休んだので、私と香澄の二人でお茶をした。

香澄は女性四人の中では一番若くて、このとき二十六歳だった。まだ結婚して一年くらいだと聞いていた。

「恭子さん、ここですよ。ここ」

香澄が先に確保していたテーブル席から私を呼んだ。

「ねえ香澄、二人っきりでお茶するのって初めてね。なんか今日はいつもは聞けない面白いことでも聞いてみようかなー」

私は少しウキウキした気分で香澄に言った。普段は三人か四人でお茶をするから、当たり障りの無い話題、つまり昨日観たテレビのドラマや音楽番組の話、最近話題になっているワイドショーネタのような話、それにスクールに何人かいる若くてかっこいいテニスコーチの話がほとんどだった。若くてかっこいいテニスコーチはたい

てい大学生か大学院生で、体育会かハードに練習をする同好会に所属しているアルバイトが多いのだが、私達女性陣は比較的年齢が近いのでよく彼等をからかったりしていた。でも、今日は香澄の個人的な話を聞きたいと思っていた。

「えー、ないですよ。面白い話なんて。それよりも、今度テニスコートを借りて、みんなでテニスやりませんか。もちろん御主人も入れて」

香澄は楽しそうに話した。

「いいアイデアだけど、うちはだめね。うちの旦那テニスできないし。前にやろうって誘ったこともあったんだけど、どうやらやる気もないみたいなの。土曜日はこの後二人でスーパーに買い物に行って、後は旦那のテレビゲームにつきあうのがおきまりのコースなのよ。香澄のところはどうなの？」

「えー、私のところですか…、うーん、彼はテニスがすごくうまいと思うんです。結婚する前に一回だけやったことがあるんだけど、私じゃ全然相手にならなかったから。彼、高校のときにインターハイに出たって言ってたからスクールに来れば上級クラスくらいかもしれないです。私が下手だからあまりやらないけど、本当は彼もっとテニスやりたいんじゃないかなーって思ったりしますね」

香澄は少し上を見上げて、考え込むようにして言った。

「ふーん、すごいわね。それに、旦那のこと彼って呼ぶの、なんかまだ熱々って感じがするわね。結婚して何年になるの？」と私は尋ねた。

「えー、まだ一年くらいなんですよ。なんかまだ恥ずかしくって、主人とか旦那とかって言えないんです。恭子さん御主人のことを他の人に「主人」とか「旦那」とか「亭主」とかって呼べるようになるのにどのくらいかかりましたか？」

と香澄が質問を返してきた。

「さあーどうだったかなー。確かに最初はなんか恥ずかしくて違和感があったけど、しばらくして慣れたわね。どれくらいかなー…、

よくわからないけど、たぶんすぐ慣れるわよ。でも亭主ってのは使わないけど。ねえ、話は戻るけど、私は香澄はテニスが結構うまいと思うのよね。ほら、私なんかよりバックハンドよく返せてるじゃない。香澄はスクールに入る前にテニスやってたんじゃないの？学生の時とか職場とかで」

「えー、うーん、少しだけならありますよ。高校一年のときにテニス部だったんです、でもほんの一年でやめたから、全然だめなんですよ。それより恭子さんは？」

「ねえ、さん付けはやめて恭子って呼んで。私たち二歳しか歳が違わないんだし、それに香澄のほうがスクールの先輩じゃない」

私がそう言ったのは、香澄と仲良くなりたいと思っていたからだ。

「ええ、すぐにはできないかもしれないけど、慣れるように頑張ってみます」

「思い切って何回か『恭子』って呼び捨てにすればいいの、すぐに慣れるわよ」

と私は言った。

「私ね、大学でテニスとスキーのサークルに入っていたの。でも、まあレジャークラブみたいなものよ、楽しければいいって感じの。年中テニス合宿とかスキーツアーとかがあって、まあそれは結構楽しかったんだけど、テニスはうまくならなかったわね。でもスキーは少しうまくなったかも」

そのときは、そんな話をして彼女と判れた。私達はそれぞれ車に乗って同じ街のそれぞれのマンションに戻っていった。

3　新婚のマンション

3　新婚のマンション

土曜日のスクールが終わって帰りのお茶をしようって誰かが言う前に、私はみんなを家に誘う提案をした。

「あのー、もしよかったら私のところでお茶しません？」

「えーいいの？　香澄。彼居るんでしょう？」

と恭子さんが尋ねた。

「今日は大丈夫なんです。今日は彼朝早くから仕事に行って帰りも遅いから」

と私は答えた。

スクールの四人の女性の中で一人は都合が悪いからと帰ったので、恭子さんと優香さんが来ることになった。私たち三人はそれぞれの車で移動して、私はマンションの駐車場に、恭子さんと優香さんはマンション近くの公園横に路駐して、マンション入り口で合流してから私の部屋に向かった。

私と私の彼、祐樹（ゆうき）の住むマンションは駅から歩いて7～8分のところにあった。傾斜地に沿っていくつかの棟があるのだけれど、私達の住む棟は最も南よりにあったので日当たりがよく、前には高い建物が建っていなかったので見晴らしもよかった。部屋は6階に在り、そこは結婚が決まってから、彼がローンを組んで買った中古マンションだったのだが、前に住んでいた人がリフォームをしてくれていたから中はとても綺麗（きれい）だった。私は部屋の中の家具や荷物をなるべく少なくしたいと思っていたから、必要最小限の家具と電化製品しかないシンプルな2ＬＤＫだった。

「ねえ、とっても綺麗にしてるじゃない。これじゃー私の家には呼べないわね。私のとこなんて主人のいらなそうな荷物がいっぱいだもの。それに、香澄さんの趣味なのね。カーテンのピンクがとても

綺麗(きれい)でなんか乙女チックな気分が漂ってるわ」
　と優香さんが言った。
「ええ、ちいさな家だからこれくらいじゃないと息苦しくなるから」
「へえー、ベランダから駅が見えるのね」とベランダに出ていた恭子さんが言った。
「香澄、あなた夜中に外を眺めたりするのかしら？」
「ええ、月や星が綺麗だったりするとたまに夜ベランダに出ますよ」
　と私は言った。
「ねえねえ、あそこにトンネルが見えてるじゃない。深夜にあのトンネルに入っていく電車を見たことあるかしら？」
　と恭子さんは不思議な質問をした。ベランダから見える駅の先にトンネルの入り口が五つ見えている。
「ええ、最終の電車とか、あと夜には長い貨物列車が来るみたいですよ。あんまり良く見えないですけど、夜中にも線路の音が良く聞こえますから」
「そうよね。それで、ほら、あそこの一番左のトンネルだけど、夜あそこに入っていく電車なんか見たことある？」
「うーん、よくわからないです。電車がどのトンネルに入っていくのかなんてあまり気にしたことがないんですよ。あのトンネルがどうかしたんですか？」
「ううん、なんでもないの。気にしないで」
　部屋に入ってから私は紅茶を入れ、皆で途中で買ってきたケーキを食べながら、故郷の話や学生時代の話で盛り上がった。
「へえー、優香は東京生まれの東京育ちなんだ。じゃー江戸っ子のお嬢様なのね？」
　と恭子さんが言った。
「違うのよ。住んでたのが下町方面だからもう生活はゴージャスじゃなくってシンプルすぎるって感じね。高校にはお嬢様みたいな人も何人かいたけど、私の友達にはいないわね」
「ねえ、香澄はどこの出身なんだっけ？」

「えー、私ですか、私は生まれたのは北海道だけど、小学校から高校までは仙台にいて。それから筑波の大学を出て東京で就職したんですよ」
「へぇー、うちの旦那も小中と高校は仙台だったんだぁ。もしかしたら、どっかで出会ったりしてたかもね」
　と恭子さんは言った。
「そーなんですか。じゃー今度ご一緒できる機会があったら、恭子さんの御主人と仙台の話で盛り上がっちゃいますよ」
　と私は陽気に答えた。
「えぇ、お願いするわ。彼あんまり昔の話しないから、中学や高校の時に何してたのかよく知らないのよ。私が知ってるのは大学時代の彼だけね」
「恭子さんたち、大学の時に知りあったんですか？」
「えーそうよ。確か大学三年の冬にサークル企画のスキーツアーがあったんだけど、あいにく人が集まらなくって、ほら、貸切バスをチャーターしたから集まらないと大変なのよ。それで、幹事が知り合いのジャズ研の連中をさそったのよ。そうしたら、ジャズをやってる人達は誰も来なかったのに、ロック系の連中が沢山きて、その中の一人だったのよ」
「じゃーミュージシャンなんですね」
「ちがう、ちがう、大学から始めたへたくそなドラマーよ。今も昔の連中とバンドやってるみたいだけど、まあ、うまくはないわね。それよりも、香澄の話を聞かせてよ。まず、彼とどこで知り合ったのかからよ」
　私は自分の話をするのよりも、人の話を聞くのが得意で好きなような気がしていた。だから、みんなに私がどのようにしてこの部屋の住人になったのかをうまく話せる自信がなかった。
「彼、大学の研究室の先輩なんです。私、専攻があんまり女の子っぽくないんです」
「ちょっと待って、じゃー私たちが当ててみるわ」

と恭子さんが言った。
「女の子っぽいっていえば、文学部とか教育学部それに栄養とか家政なんかでしょう。だから、女の子っぽくないっていうと、弁護士志望で法学部じゃないの？」
「ちがうんです」
「じゃー政治家志望で政治経済学部かしら？」
他にも、医学部、工学部、外国語学部のスワヒリ語学科なんてのも話題に上ったけど、全て違っていた。
「私、理学部の物理学専攻なんです。物理学科って一学年定員四十人で女の子って三人しかいなかったんですよ」
と私は言った。
「物理？　それって聞いただけで頭痛くなるわね。私高校の時にいつも赤点すれすれだったのよ。あー、どんなことやったのかしら、ボールの落下とかドップラー効果とか…、それからクーロンの法則とかニュートンの法則とか単語はまだいくつか覚えてるけど、どんな話だったのか全然思い出せないわ」
優香さんは頭に手をやって嫌そうに言った。
「私も物理の内容はあまりよく覚えてないけど、ただそのシチュエーションてすごいんじゃない、なんかお姫様状態じゃないの？　私なんか教育学部だから女の子が結構沢山いるじゃない、だからもう有難味が全然ないらしくって、同じ学科の男子なんて真剣に誘ってなんかこないのよ。ねえ、それって私の理想とする状況なのよ。香澄、大学ではすっごくモテたんじゃないの？」
と恭子さんが少し興奮ぎみに言った。
「それって誤解なんですよ。国立の物理学科なんてくる人は、みんなオタクなんです。女の子に興味津々なのに、積極的に誘う人ってほとんどいないんですよ。それに、私達女の子三人は結束が固くって行動もいつも一緒だから、誘うほうも難しかったかもしれないですね」
「でも、三人まとめて誘われないのかしら？」

「えー、でも中の一人がすっごい男嫌いで、誘われてもみんな断っちゃうんですよ。だから、四年生になって研究室に入るまで男っ気がゼロでした。でも、研究室に入ったら同級生も先輩も先生まで全部男性で、ずいぶんちやほやされましたよ。それで、彼はその研究室の先輩だったんです」

と私は言った。

「ふーん、でも男は沢山いたんだから選り取り見取りじゃない。その中で今の彼を選んだのはどうしてなの？」

「たぶん、私に一番関心がなかったんですよ。彼そのとき博士過程にいて実験やら論文書きやらですごく忙しくって、全然声もかけてくれなかったんです。でも、研究室で同じ部屋にいたから、私、一生懸命熱中している彼が素敵だなと思って…」

「それで？」

「だから、たまには息抜きして私と映画見にいきませんかって誘ったんです」

私は少し赤くなって答えたような気がした。

「へえー、以外ね。私は、香澄は結構おとなしそうな品のいいお嬢様のような気がしていたのよ。自分から男の子を誘うなんてそんな積極的な一面があるなんて判らなかったわ。今日ここにきて良かったわ」

「なんか、そのときは成り行きでそうなっただけなんですよ」

そんな話がしばらく続いた後はテニススクールの話題になった。もちろん、どのコーチが素敵だとか、誘惑してみようかなんていう他愛のない話題だった。

「ねえ、今度駅の近くにある居酒屋でスクールのコーチなんかも誘って皆で飲み会やりましょうよ。コーチ達は私が誘ってみるからさぁ」

恭子さんは嬉しそうに言った。

4　予言

4　予言

僕と香澄が新婚旅行から帰ってくると、しばらくして妹から電話があった。

「ねえお兄ちゃん、あのさぁー、ちょっと聞きたいことがあるんだ。でも、答えにくかったら答えなくてもいいからさぁ」

妙にあらたまってよそよそしい言い回しだった。

「いや、たいていのことには答えられると思うよ。まあ、これから五十年後の財産分与のことは無理だと思うけど」

「ねえ、香澄さん左の卵巣ないわよね？」

えー、何故知っているんだ。卵巣膿腫（らんそうのうしゅ）の手術で卵巣を一個摘出したのは、半年くらい前で僕がプロポーズした直後だった。僕は、このことを両親にも、ましてやすでに嫁いで家から出ていた妹にも言っていないのだ。それに僕自身がそれが右なのか左なのかを知らなかった。いや、多分聞いたかもしれないけど覚えていなかった。

「どうして知ってるんだ。確かに卵巣は一個ないけれど、僕はそのことを誰にも話してないんだ。誰か、香澄の親戚からでも聞いたのかい？」

「ううん、違うの。今ね、柳井の知り合いの霊能者のところに居るのよ。その人ね、柳井の友達の知り合いなんだけど、写真を見ると、写ってる人の守護霊とかその人の将来とかが判るらしいのよ。最近、柳井が転職しようかなって言ってるから、一度相談してみたらってことで来てるのよ。それで、ついでだからお兄ちゃんと香澄さんの結婚式の写真も見せたのよ。そうしたら、そう言われたから、びっくりして電話したのよ」

と妹は言った。妹は亭主のことを苗字で呼ぶくせがあった。僕は香澄に手術で摘出した卵巣が左なのか右なのかを確認した。

「なあ、驚いたよ。その人の言うとおり、香澄は左の卵巣がないそうだよ」
「えー、本当なの…、それじゃー霊能者の話のつづきをしてもいいかしら」
「ああ、なんだか怖いけど興味があるよ。是非聞かせてくれ」
と僕は言った。
「いーい、お兄ちゃん、香澄さん卵巣は一つだけど子供は二人生まれるそうよ。一人目が女の子で二人目が男の子なんだって。お兄ちゃんの家に関してはそれだけね」と妹は言った。
「お前のところはどうなんだ、子供だよ」
「えぇ、私ん家は女の子が二人生まれるそうよ。それに柳井は後三年くらいしたら転職してもいいらしいわ。それじゃーもう電話切るからね」
受話器を置くと、僕はこの話を香澄に話した。香澄はとても不思議がったが、子供が生まれるという話を素直に喜んでいた。僕は半年前のことを思いだした。

それは去年の六月のことだ。香澄の二十五回目の誕生日が来るその日に、僕は彼女にプロポーズしようと決めていた。その日僕等は都内の水族館で時をすごして、夜には東京港を見渡せるホテルで食事をした。
僕は博士号を取ったあと、大学に残って准教授、教授という道を進みたかったけれど現実は甘くはなくて、都内にある政府系研究機関でポスドクという身分が不安定な研究職として働いていた。将来に不安はあったが、彼女と付き合い始めて二年になろうとしていて、同じ大学を卒業した彼女も都内で働いていた。
そのとき香澄は高層階の窓から見える夜景がとても綺麗だと喜んで、その方角ばっかり見ていた。
「ねえねえ、祐樹、ほら、あそこ飛行機飛んでる。きっと羽田に降りるのね。」

「ねえ香澄、大事な話しがあるから、僕の話を聞いて欲しいんだ」
「え…、はい」
「僕と香澄は結婚するんだよな」
「うん」
プロポーズとその返事はそれが全てだ。たぶん僕の声は緊張で少し震えていて、彼女の声は冷静で落ち着いていたように思えた。そのやり取りはロマンチックでもドラマチックでもないけれど僕はとても嬉しかった。香澄もとても嬉しそうだった。だから、二週間後にその話を聞いたときはショックだった。
香澄はプロポーズの一週間後くらいにお腹が痛いといって、いつも行っていた内科に行った。その晩かかってきた電話は不安そうだった。
「今日内科に行ったら先生が…、卵巣脳腫(らんそうのうしゅ)かもしれないから、大きな病院に行くようにって紹介状書いてくれたの。ねえ、私どうしよう」
「香澄、心配ないよ。僕が病院に付き合うから一緒に行こう」
僕たちは二日後に、都内の大きな病院の産婦人科に行った。彼女は不安気な顔で一人で診察室に入り、僕は待合で待っていた。出てきた彼女はさらに不安気な顔になっていた。
「たぶん卵巣脳腫だから、もうすこし検査をして、もしそうなら手術をするそうよ」
彼女は画像診断のＭＲＩ検査等を行って診察室に戻ってきた。僕は香澄の兄で付き添いということにして一緒に診察室に入った。コンピューターの画面に画像診断の結果が整然と写し出されていた。話をするのは四十歳くらい女医で綺麗(きれい)な人だった。
「あなた、お兄さんでしたっけ？　もしかしたら恋人かしら？」
「いや、兄ですけど」
「まあいいわ。彼女も大人なんだし、ほら、女同士で大切な話があるから外で待っててもらえないかしら」
僕はまた待合で待った。出てきた彼女は泣きそうな顔をしていた。

「今度の金曜日に入院して、月曜日に手術だそうよ」
「そうか、大丈夫だよ。僕が一緒だから」
「ねえ、大事な話があるから…、病院から出たら聞いてほしいの」
彼女は暗い顔で暗い声で言った。
僕等は病院を出ると歩いて十分くらいのデパートに入った。何階かは忘れたけれど、家具売り場のある階に設置されているベンチに二人で座った。そこからはベットやらダイニングセットやら食器棚なんかの、僕等の新婚生活に必要になりそうな物がたくさん見えていた。僕は新婚生活にどんな物が必要になるのかよく判らなかったのだが、その時は「ベットは必要ないな、布団のほうが気が楽だし」とか「ダイニングセットはあまり明るい色よりも、ダークな色調のほうがいいな」と考えていた。
「ねえ、祐ちゃん…、私結婚できないかもしれない…」
香澄はさっきと同じ暗い顔で暗い声で言った。
「なんで？…、どうしてなの？」
「卵巣脳腫（らんそうのうしゅ）って良性と悪性があるんだって…、それで、良性か悪性かは手術して取り出してみないと正確には判らないって…」
彼女の顔は付き合ってから一番暗い顔だった。僕はどうしていいか判らなかった。明るくしたいと思ったが、頭の中で「悪性って何だ」っていう声が渦巻いていた。僕は声を振り絞って尋（たず）ねた。
「でも、卵巣って二個あるんだろ？」
「そうよ。でも卵巣癌で転移もあったら、卵巣二個どころか子宮だってなくなるかもしれないのよ」
香澄は僕の胸に顔をうずめて泣きくずれた。僕は声を掛けることができなかった。
僕の頭に両親の顔が浮かんだ。
僕は千葉県にある普通の街で普通の家庭に育った。父親はサラリーマンで母親は専業主婦だ。しかし、僕の両親は一般的な家庭に育った訳ではなかった。父は六人兄弟の四番目だったが、生家には住みこみのお手伝いさんが二人と、住みこみの家庭教師の医大生が一

人いた。父の父つまり僕の祖父は、先端科学機械を製造する会社の専務であり、祖父の義兄が社長をやっていて、超高圧水素ガスコンプレッサーではかなり有名な会社だったらしい。その会社は祖父の死後しばらくたって倒産したので、母とお見合い結婚したときには父は平凡なサラリーマンだった。父の叔父叔母やその親戚には、理科系の人がたくさんいて、僕が物理学を専攻したのも血のせいだと思っていた。

母親は商家に生まれた。その生家は海産物問屋を手広くやり、街でも有名な裕福な家で、庭に蔵があったらしい。母が生まれるころが最も隆盛（りゅうせい）で、母の母つまり僕の祖母は造り醤油屋を営むもっと大きな家から嫁にきたらしい。僕の叔父は酒を飲むと、「俺が満州に出征した時には、町中の芸者が駅に見送りに来たんだ」と言っていたが、それは本当らしかった。でも、空襲で家も蔵（くら）も焼け、街で一番と言われた防空壕にも直撃弾が落ち、奇跡的に助かった母と祖父以外は一族は皆死亡した。商売はたたまざるを得ず、生活は一般的な暮らし向きになった。

だから、僕は普通の家庭に育ったけれど、小さいときから両親の思い出話をいやというほど聞かされてきた。僕の頭には、いつか成功して家を再興したいとの気持ちが強くあり、そして、それが僕一代では無理でも、子や孫の代にはとの思いがあった。だから、子孫が生まれないかもとの話は、それが可能性の話だと解ってはいても僕にとって、彼女を取るのか家の再興を取るのかの二者択一をせまるもののように聞こえていた。

僕の決心は決まった。僕は香澄との人生を歩みたかった。どんなことがあっても香澄を幸せにしてやりたいと心の底から願った。

「大丈夫だよ香澄。僕は香澄の全てを愛している」

「ほんとうに？」

「ああ、どんな結果が出ても香澄と結婚するんだ。だから、香澄もどんな結果が出ても僕と結婚するって約束しろ」

「ほんとうに、ほんとうにそれでいいの。祐樹…」

手術後の検査の結果、一個の卵巣が卵巣チョコレート膿胞（のうほう）という良性腫瘍（りょうせいしゅよう）であることが判明した。女医さんは付き添いの僕に切除した卵巣を見ますかと聞きにきたから、見ないと言った。しばらく時間をつぶして病室に行くと麻酔は覚めていて、結果を聞いたのか彼女の顔も声も久しぶりに明るかった。

結納が終わってから僕は小さなマンションを購入し、それから半年後に僕等の職場がある都内で結婚式を挙げた。

5　第六感

5　第六感

まだ日差しも強い秋の日曜日にスクール仲間の四夫婦でテニスをすることになった。一組の夫婦はこれなくなって、集まったのは、私たち小田誠一郎・恭子と、坂本祐樹・香澄夫婦、四宮康司・優香夫婦の三カップル六人になった。テニスなんかやりたくないっていう誠一郎を「見てるだけでいいから」と説得して連れてきた。

待ち合わせのコートに集まると簡単な挨拶をした。私がコートを借りたから一応幹事ってことでそれぞれを紹介した。

「えーと、私は小田恭子です。それからこっちが旦那の誠一郎です」

私は自分たち夫婦の自己紹介をした。

「小田誠一郎です。僕はテニスはできないので、今日は見学させてもらいます。すいません」

「こちらが、四宮優香さんと御主人の…、えー、お名前が…」

「四宮康司です。よろしくお願いします」

「それから、こちらがまだ新婚ほやほやの坂本香澄さんと御主人の…」

「祐樹です。今日はよろしくお願いします」

誠一郎を除いた五人でテニスを始めた。ダブルスの試合をする前にみんなでストロークの乱打をしたり、ボレーボレーの練習をしたりした。優香の御主人は大学時代にやっていたからそこそこ打てたし、香澄の御主人も久しぶりですとはいっていたけど、高校でインターハイまで出るほどで、始めはホームランばっかりだったけど、慣れてくるととてもうまかった。

「ねえ誠ちゃん。あそこで打ってる香澄さん、仙台に長くいたことがあるんだって、ねえ、後で話してみたら」

と私はコートのはずれでぼーと立っていた誠一郎に声をかけた。

「ああ、後で話してみるよ。それより、ほら隣のサッカーコートで試合してるから、俺あっち見に行ってくるからさ。また、適当なときに戻ってくるよ」
「まったく自由人なんだから。しかたないわね」
結局五人で一人が審判をやってダブルスを数試合したけど、誠一郎は終わりの時間まで帰ってこなかった。
「香澄さんの御主人って高校のときインターハイに出られたんですってね。やっぱりとっても上手ですね。なんかフォームがとっても綺麗ですもの」
と私が言った。
「昔のことですよ。それにずーっとやってなかったから加減がわからなくって。もう少し練習したらまたやりましょう」
と香澄の御主人が答えた。
「ええ、是非やりたいわ。うちも旦那に少しやらせるから」
と私が言った。
皆で食事に行かないかと優香が提案したのに、誠一郎が明日の仕事の準備をするから帰りたいと言って、食事は次回にということになって解散した。
「ねえ、誠ちゃん。あなた今日へんだったわよ。ずーっとコートに来なかったし、食事だって行かないって。ねえ、日曜日に仕事の準備なんてしたことないじゃない」
「だって、テニスには関心ないし、それに今日は早く帰ってさー、サッカーの試合見たいんだよ。Jリーグの」
と誠一郎はぶっきらぼうに答えた。
「ねえ、香澄さんと仙台の話はしたの？」
と私は尋ねた。
「するわけないよ。ずーっとサッカーの試合見てたんだからさー」
「でも行くときには、仙台の話が楽しみだって言ってたじゃない」
「初めて会う人とそんなに話しなんかできないよ。それが普通だって」

誠一郎の答えはますますぶっきらぼうになった。
「もういいわよそんなこと。でも、香澄さんすらっとしていて魅力的じゃない？　スコートから伸びる足だって細くてカモシカみたいだし、私だったら見とれちゃうなぁ」
「いや。俺は見てないし、あんまり関心ないからさー」
誠一郎は冷静に受け答えしているけど、どうも反応がいつもと違い少し変だと私は思っていた。「もしかしたら香澄さんに一目ぼれでもしたのかしら？」いーえ違うわ、「たぶん、誠一郎と香澄さんは知り合いなのよ。仙台で二人は会ったことがあるかもしれない」女の勘がそう告げていた。

結局二回目のテニスは実現しなかった。香澄さんが妊娠してスクールもしばらく休むことになったからだ。私の暮らしは月曜から金曜までは誠一郎と一緒に出勤し、定時で退社したら会社の近くで女友達とお茶をして、適当な時間がきたらその後はどこにも寄らずに帰宅して、夕食を造りながら洗濯をする。メールで連絡が来て彼が早く帰れる時は家で夕食を共にしたが、たいていは遅かったから一人でテレビを見ながら食べた。土曜日は朝一番でテニススクールに行き、友人とお茶をしてから誠一郎と一週間分の食料をスーパーで買ったりすればもう夕方で、それから二人でレンタルＤＶＤを見たりテレビゲームをすれば深夜になる。二人で海に行ったりスキーにいったり映画に行けるのは日曜日で、ときどき彼はバンドの練習に行き、私はたまーに実家に帰った。

「ねえ、お父さんから昨日電話があって、今度の日曜日私達二人で遊びにこないかって。なんでもお母さんが友達と二泊三日の旅行でいないんだってさー」
と私は誠一郎に言った。
「うん、まー今度の日曜は別に予定がないからいいけど。でも恭子、お前あんまり実家にいくのは好きじゃないって言ってたんじゃーな

かったっけ」
「えーそんなこと言ったかなあ？　まあ大丈夫よ。日曜日にはお母さんいないんだから」
私の実家は駅で五つくらい下りに行った街にあり、そこには今両親が住んでいる。弟は大学院生で名古屋に住んでいて今は居なかった。
私と母は血が繋（つな）がっていない。私の産みの母親は私が二歳のときに亡くなった。私を生んでからずーっと体調を崩して寝込むことが多かったらしいが、私は何にも記憶していない。私の小さい時の写真や実母の写真も見たことがない。きっと父が今の母に気を使って処分したのか、もしかしたら実母の実家にでも送り返したのだろう。その母の実家とも交渉が途絶えていたから、その実家がある街の名前は聞いたことがあったけど、そこに誰がすんでいるのかもよく知らなかった。もちろん育ての母の実家には何回も行ったことがある。今の母もその実家の人達も皆全員とてもいい人達で、私に暖かく接してくれた。　でも分別をわきまえて、家族の真実を知った後ではそれはお客様に暖かく接するようなものなのではないかと思うようになり、そんな自分を卑しい考えを持った捻くれた女だと自分を責めてきた。父が私ともっと会いたがっていることは知っていたけれど、やっぱり実家への足は進まなかった。駅五つくらいで、何かあればすぐ行けるところに住むことが、今の私にできることだと思っていた。
「ねえ恭子、じゃー日曜日に久しぶりにお墓参りに行かないか。ほら、お前の母さんの。お父さんと三人でさー、たしかお墓は近かったよなー」
「うんいいアイデアね。明日お父さんに電話しとくわよ」
日曜日は小雨交じりの曇りだったが予定どおりにお墓参りに行くことにして、十時頃家を出た。道がすいてれば車で三十分なのに、日曜日は途中で渋滞することが多かったから、電車で五駅下りにある私の実家に向かった。家に着くと玄関は開いていて父が居間で新

聞を読んでいた。
「ねえお父さん、久しぶり。今日はあいにく雨になっちゃたけど、お墓参りに行こうと思って駅前の花屋さんでお花買って来ちゃった」
「うん、お母さんがいないから、昼を外で食べてその足でいこうか」
と父が言った。
「お母さんは何時帰ってくるの？」
「明日の夕方には帰ってくるさ。それよりどうしたんだ。急に墓参りに行こうだなんて」
「えっ、まあいろいろ考えたりしてさー…、ねえ、私を産んでくれたお母さんの話を少し聞きたいなと思って、ほら、いままであんまりその話した事なかったじゃない」
と私は前から言ってみたかった事を口に出した。
「そうだな。今日はその話をするにはいいかもな」
「ねえ、お母さんてどんな人だったの？」
「恭子、お前は幾つになったっけ」
「二十八よ。もうすぐ二十九になるところよ」
「そうか、じゃーお母さんが亡くなった歳と同じくらいだな。お前を産んでくれた母さんは二十四でお父さんと結婚した。親戚の叔母さんの紹介で知り合ったんだ。二十五でお前が生まれて二十七で亡くなったから…、だから生きていれば五十三歳かな。明るくてやさしかったけど体は丈夫なほうじゃなかったな。だから最後は肺炎で亡くなったんだけど、もう体に抵抗力が残ってなかったのかも」
「どんな顔だったの。写真も一枚もないからさー、もしあったら見たいのよ」
と私は言った。
「お前にはあまり似てないような気がするんだ。でも写真を見てみればやっぱりよく似てるのかもしれないな。親子ってそういうもんだろ。それから、写真を全部処分したことをお前にいつか謝ろうと思っていたんだ。それはお前のお母さんとの約束だったんだ。でも、一枚くらい残してもよかったんじゃないかって、今でも思うことが

ある」
「ねえ、何を約束したのよ」
「亡くなる前の病室で、もう呼吸ができなくってしゃべれなくなる前にお母さんにお願いされたんだ。…もし私が死んだ後で、恭子が物心つく前に再婚するのならば、私の写真は全て捨ててほしいって言ったんだ。俺ができないかもって言ったら、恭子のためにするのよって。苦しみの中で必死に頼んでいることが判ったんだ。だから、わかった安心しろ、もし、そうなったときは絶対そうするからって約束したんだよ」
「そう…、そうだったの…」
「お前が四歳の時に叔母さんの強い勧めもあって、いまの母さんとお見合いして再婚したけれど、俺は写真をどうしたらいいか本当に悩んだんだ。お前は忘れたかもしれないが、お前は今の母さんにすぐになついたから…、まだ再婚する前のことだよ。だから洋子が全てを捨てて欲しいと言った意味を考えて、洋子との約束を守ることにしようって。再婚が決まったときに、洋子だけが写っている写真と遺影は洋子の実家に持っていった。二人で写っている写真と・・・、それから三人で写っている写真は宮古川の川原で焼却したんだ。煙が立ち上って行く夕暮れの空を見て、俺は涙が止まらなかった。もう二十年以上前のことなのに昨日のことのようによく覚えているよ」
　私は声をあげて泣いた。父と誠一郎も涙を堪えるのが精一杯のように見えた。いや父は泣いていたのかもしれない。
「もし、写真を見たいのなら、富士宮の母さんの実家に行けばきっと在るだろう。母さんの弟が跡をついだから、今度住所と地図を書いといてやるよ」
　私達は外で食事をして実家から歩いて十五分ほどのお寺まで歩いた。お寺は浄土宗で敷地内には釣鐘堂があった。お墓はお寺に隣接していて沢山の桜の木が植えられている。雨で墓石は濡れていたけど水を掛けて御花を供え、線香を手向けた。

「ねえお母さん、私に子供が生まれたら夢でいいから逢いに来てほしいのよ。約束よ、お母さん」
私は手を合わせて心の中で母と約束をした。

それから二ヶ月ほどして香澄から電話があった。
「あっ、恭子さん。私、香澄です。久しぶりです。お元気ですか？」
「もしもし、あー、香澄、どう…、もう産まれたのかしら？」
「えぇ、二週間くらい前に産まれて、今仙台の実家にいるんですよ。恭子さん生まれたら絶対電話してって言ってたから」
「そー、おめでとう香澄…、仙台にいるの？　あーそうよね実家仙台って言ってたもんね。それで男の子、女の子？」
「あー、女の子です。名前は沙耶香（さやか）ってつけたんです」
「まあー素敵な名前じゃない。どういう字なの？」
「えー、さんずいに少ないと、あと耳辺であるのかわからないけど耶（や）っていう字わかります？」
と香澄は言った。
「沙は解ったけど、やが解らないわ」
「あーそうそう、このはなのさくやひめ（木花咲耶姫）って解りますか？」
「えぇー、ますます解らないわ。でも、まあその「や」とあと香澄の香を取って沙や香ちゃんなのね。いい名前よ。今度会うのが楽しみだわ」
と私は答えた。
「あと三週間くらいしたらそっちに帰れると思うんで、また是非マンションに遊びにきてください」
「ええありがとう。誕生祝い持って伺わせていただくわ」
「えー、全然そんなの気にしないでくださいよ。私困りますから」
電話の後で半年以上前のテニスを思い出していた。誠一郎の実家も仙台だし、久しぶりに仙台に帰ろうって誘ってみよう。そういえば私彼の実家に何回行ったかなあ。結婚前に両親と挨拶（あいさつ）に行って、

結婚式のあとでまた挨拶に行った。それから一昨年の正月に行ったけど、蔵王（ざおう）にスキーに行った帰りにちょっと寄っただけだ。よし、絶対に行くのよ。今度は彼の実家のお墓参りもしたいし、それに仙台には何か秘密が隠されているかもしれないから。

6　誕生

6　誕生

僕と香澄の母親は、病院で子供が生まれるのを待っていた。そこは仙台にある大きな市民病院で、彼女は二ヶ月くらい前から実家に帰って出産の準備をしていた。

僕は都内で仕事をするからそのままマンションに留まっていたのだが、その日の朝、出勤する前に香澄から電話があり、今日生まれそうだからこれから母と病院に向かうとのことだった。僕は新幹線で仙台に向かうことにした。たぶん昼過ぎには到着するだろう。途中で職場に電話して、今日から三日ほど休暇を取ることの許可を得た。

仙台に到着すると、空に雲一つない快晴で、僕はタクシーで市民病院に向かった。病院に着くと香澄はもう分娩室に入っていて、彼女の母親がひとりで廊下の長いすに腰掛けていた。分娩室を隔てた廊下の反対には処置室という名前の部屋があり、点滴のチューブを着けた女の人が苦しげな表情でベットに身を横たえていた。点滴は陣痛促進剤だろうと思った。その女の人は苦しいのか時々うめき声をあげた。そこにいると、女性が命がけで出産に立ち向かっているのだということをひしひしと感じた。

僕は廊下の椅子に腰掛けて、香澄と一緒に子供の名前を考えていたことを思い出していた。香澄が仙台に戻る前だから、三ヶ月ほど前のことだった。僕たちはあの不思議な妹からの電話を、つまり霊能者の言葉「子供は二人生まれるそうよ。一人目が女の子で二人目が男の子なんだって」を信じていた。だから、二人とも女の子の名前しか考えていなかった。

「ねえ香澄、僕達が最初に子供にプレゼントできるのが名前だろ。だから名前は二人が気に入ったものじゃなきゃだめだと思うんだ。

僕がいくら気に入っていても、香澄がいやならば付けないことにしよう。もちろん反対もだめさ」
「ええそうね。それから名前は女の子のだけ考えればいいと思うの」
「そうだね。もし男だったら、生まれてから考えようよ」
それからの作業は結構大変だった。僕等は一冊の名づけ辞典を購入し、そのなかから音の印象だけで気に入った呼び方を各自二十個づつ選びだした。すると二人で重複する呼び方が七個集まった。その七個に二人で各々順位をつけて点数集計すると一位は「さやか」だった。
次は「さやか」を表現する漢字を決めるのだが、僕は姓名判断にも凝っていたのでその作業も大変だった。漢字を決めてからインターネットの姓名判断サイトで吉凶を確認するのだが、その数は結構な数になった。そして始めてから一週間後に僕等が決めたのは「沙耶香」だった。
「ねえ、香澄の香の字が入ってるって言い名前だと思うんだ」
「そうね、私も気に入ってるわ。でも、もし男の子だったらどうしよう。こんなこと生まれてからできるのかしら」
「まあその時はその時さ、もう男の子の名前を考える気力は無いよ」
腕時計は午後四時半を回っていた。そしてしばらくすると、ものすごく大きな泣き声が廊下に響(ひび)いて、看護婦さんが出てきた。
「４時４４分に生まれました。女の子ですよ。おめでとうございます」
その時の僕の気持ちは単純にうれしいというものではなかった。それは主に三つの感情から構成されていた。最初のそして一番大きなものは、大きな泣き声をあげて誕生した子供を本当に喜ぶ気持ちだ。二番目はやはり女の子だったか、霊能者の話はまた当たったのかという不思議な気持ち、そして三番目は４時４４分という時間に対する言いようのない不安感だった。
僕は映画のオーメンを思い出したのだ。新約聖書の黙示禄には魔王サタンには獣の証(あかし)として「６６６」の刻印が刻まれていることが

記されている。「４４４」に意味は在るのか？　日本の通常の伝統に従えば、ホテルの部屋の番号には「４号室」はない。それは「死」に通じていると考えるからだ。だから「４４４」は「死死死」を連想させたのだ。

数字の「４」に関する別の意味を知ったのはしばらく時間がたってからで、ある人の話からだった。

「ユダヤの秘密の奥義（おうぎ）カバラは全ての数字の序列には重要な意味が在ることを示しています。そして数字の４はキリスト教では最も神聖な数字なんですよ。新約聖書の福音書つまりマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネと福音書の数は四つです。それは偶然ではなくて、４が最も神聖な数字だからなのです」

とその人は言った。

その人の話はとにかく僕の心を軽くした。なぜなら、生まれてきた子供にはかすかな「死」を思わせる痕跡（こんせき）があったからだ。

気がつくと子供の泣き声は止んでいて、しばらくすると病院のベットに寝かされた香澄が分娩室（ぶんべんしつ）から出てきた。とても嬉しそうな顔だった。子供は新生児室に入ったとのことだった。

「香澄、よく頑張ったな。ありがとう」

「ねえ女の子よ。私抱かせてもらったの。とってもかわいいのよ」

「僕も後で顔を見てみるよ。それから今日は香澄の実家でお父さんに報告して、泊めてもらうから、また明日来るよ」

僕と香澄の母親は病室を出て、新生児室のガラス越しに生まれてきた子供を見た。しわしわで真っ赤な顔で眠っている我が子を見て、僕はなぜ「赤ちゃん」と呼ばれるのかを理解した。僕等は病院の玄関前に並んでいたタクシーに乗り、香澄の実家に戻った。もう日が沈んで夜だった。

7　不妊治療

7　不妊治療

恭子のテニス仲間の香澄さんに子供が生まれたとの知らせがきてから、恭子は前にもまして夜の生活を求めた。彼女の実の母親は彼女が二歳のときに亡くなっていた。そのためなのだろうけど、彼女は子供を早く欲しがっていた。

「ねえ、私早くお母さんになってみたいのよ。ほら、私本当のお母さんのこと知らないじゃない。だから私がお母さんになって、お母さんてこんなに素敵な存在なのよって子供に教えてあげたいの」

と恭子は真剣な表情で言った。

「でも、そんなお母さんの押し売りって子供にとっては迷惑なんじゃないか」

「いいのよ。その辺はちゃんとできるんだから。ねえ誠ちゃん、私子供三人ほしいんだからね」

「ああ、それじゃー頑張らなくっちゃなー」

と俺は言った。

でも、頑張ってはみたものの、もう三年も妊娠しなかった。だから彼女が産婦人科の不妊外来に行ってみると言い出したときには、彼女の真剣で切実な願いに改めて気づかされた。

カウンセリングを受けて、血液検査、栄養状態検査にホルモン検査をやったが彼女には異常が見られずに、今度卵管造影をやって卵子が子宮に到達できるのかを調べるようだった。それに、なんだかよく解らなかったが、基礎体温とかいうやつも毎日記録していて、高温期と低温期がきれいに分かれているから妊娠可能なのだそうだ。

「ねえ、誠ちゃん。私ね、今日本当に頑張ったのよ。卵管造影って予想してたのよりずーっと痛くって、だから歯を食いしばって絶えたのよ。私本当に偉かったの…、それで卵管造影の結果を聞いてき

たんだけど、どこにも異常はないんですって。それで、先生が御主人も検査を受けるように話をしてみたらどうかって言うのよ。なんか男の人って不妊の検査なんか受けるのやがる人が多いらしいんだけど。不妊治療は夫婦でやるのが基本だから、是非来てくださいだって」

と恭子は俺の反応をうかがうように言った。

「ああ、いいよ別に。恭子が真剣だって知ってるからさー、俺にできることは何でも協力するよ。それにさー、あの精液取るのって、もしかしたら若い看護婦さんかなんかがしてくれるのかなぁー」

「何言ってんのよ。馬鹿じゃない。まあ、お気に入りのエロ本でもこっそり持ってったら」

病院に行くと言ったからか、恭子は嬉しそうに見えた。

想像していたとおり、精液は指定された部屋で指定された容器に自分でマスターベーションをして採取した。精液検査の結果はショックだった。精子の数、精子の運動状態、精子の形が異常である割合などを聞かされた。精子の数は４０００～５００００、運動する精子の割合は４０％でここまでなら受精可能らしいのだが、異常な形をした精子の割合は　７０％だった。医者の話ではこの値が５０％を超えると受精は難しくなるのだそうだ。

「ごめん誠ちゃん。こんな結果がでるなんて解らなかったのよ。だからそんなに落ち込まないで…、ねぇ…」

「ああ、あんまり落ち込んでないよ…、でも少し落ち込んでるかな」

「私があんまり子供子供って言ったから、きっとバチが当たったのよ。もうやめよう検査なんか、子供はそのうちきっとできるのよ」

帰りの車の中で、彼女の目に涙が浮かんでいるような気がした。

「大丈夫さ、検査なんか。先生も言ってたろー、体調が悪い場合もあるから何回か検査をしないと解らないって」

俺は元気に答えたが、やはり気分は落ち込んでいた。

マンションに戻ってから実家に電話してオタフク風邪の話を聞いたら、「お前は幼稚園のころにオタフクをやったから、その後はか

かってないんじゃないか」と親父に言われた。でも、免疫が弱くなっていて大人になってからかかるる人もいるらしい。その後二回精液検査をしたが、結果はあまり変わらなかった。

先生は体外受精とかいろいろな方法がありそうだからと言ってくれたのだが、恭子がしばらく期間をおいて休みたいと主張したので、様子を見ることになった。たぶん俺をあんまり傷つけたくないと気使ったのだと思った。

俺は恭子と出会って付き合いだした頃のことを思い出した。

俺等は二人とも同じ大学の三年で、彼女は教育学部で俺は経済学部だった。彼女のサークルが企画したスキーツアーに人が足りなくて、バンドの仲間に誘われて参加したのだ。スキー場は八方尾根だった。私立大学は二月の始めから四月まで二ヶ月も休みになるから、スキーも三泊四日だった。もちろん宿泊は民宿だ。全部で二十人くらいで、俺たちバンド系は六人で全員男、彼女のサークルは女が十人くらいで男が四人だった。男女の数は同じなのだが、別のサークルってこともあって初日は四人の男が女の子を独占したのだが、それではまずいと思ったのかその晩、全員でトランプなんかして打ち解けた。二日目のペアリフトはだいたい男女で乗っていた。そのとき僕と恭子はペアでリフトに乗っていた。

「ねえ、あなた名前なんだったっけ？　昨日聞いたけど忘れたから、私は小川恭子、教育学部の三年よ」

「えっ、俺は岡田誠一郎。経済学部の三年で、今はジャズ研でドラム叩いてる。でもジャズじゃなくって、ロックだけど」

「私ジャズはわからないけど、ロックは聞くわよ。あなたのバンドってどんなのやってるの？」

「あー、俺達さぁ、バンドって大学から始めたから下手なんだ。だからあんまり難しい曲できなくってさー。知ってるかなー、クラプトンとかレッド・ツェッペリンとかヴァン・ヘイレンとかそんなやつだよ」

「うーん御免、良く知らないんだ。もしかして、それ結構古いんじゃないの？」
「うん、結構古いよ。ねえ、ところで、次のリフトに乗ってあのコブの上まで行ってみないか」
「えー、いやよ。すごいコブじゃない、降りれなくなったらどうするのよ。あなたに責任取ってもらうわよ」
「ああいいよ。じゃー行ってみようぜ」
俺は軽い気持ちでそう言った。そうして俺はある意味で責任を取ったのだ。恭子はその斜度が３５度くらいの斜面を降りるのに一時間くらいかかり、俺はずーっと付き添っていた。彼女は「何でこんなひどいところに連れてきたのよ。東京に帰ったら絶対おごってもらうからね。安いところだったら許さないから」と言い腹を立てた。
俺は東京に戻ってから彼女に映画とイタリア料理をおごって、そして付き合うようになった。そのころにはもう就職活動が始まっていて、俺は冗談のつもりで恭子に提案を言ってみた。
「なあ、もしよかったら俺と同じ会社受けてみないか。まだネット上で説明会の受け付けやってるからさー」と僕が言うと、「えー、面白そうじゃない。もし二人で同じところ行けたら楽しいわよね。ちょっと、やってみようかな」と恭子が言った。
そうして俺等は同じ会社の試験を受け、一緒に採用されたのだった。もちろん俺等が付き合っていることはトップシークレットだった。というか面接でそんな質問、つまり「あなたには彼女がいますか？　そして、その彼女はうちの会社の就職試験を受けてますか？」なんて馬鹿げたものは存在しなかった。
彼女は最初、中学か高校の教員になるつもりだったのだが、会社の内定が出るともう教員試験は受けないと言った。俺たちは他人のふりをして内定式に出席したのだが、帰りの喫茶店では
「二人で同じ会社に行くなんてわくわくしない。もしかして同じ部署にでもなったらどうしようかしら」
彼女の目はキラキラと輝いていた。

「ねえ、二人で仙台に行こうよ。私、誠ちゃんの実家のお墓まいりしたいのよ」
と恭子が提案したのはそれから間もなくだった。
「そうだな、ずいぶん帰ってないから行こうか。車でいけば五時間くらいだから、何もなければ次の日曜日に行こう」
「うんいいよ。じゃー家に連絡しといてよ」
「ああ、お墓にも行いたいって言っとくよ」
俺には恭子の気持ちが判っていた。どうか子供を授かりますようにと、俺の先祖にもお願いしたいのだろう。原因は彼女ではなくて俺にあるのだから。でもそれは考えすぎかもしれない、この間彼女の実家のお墓まいりをしたときに、今度は仙台に行ってお墓参りをしようと何回も言っていたのだ。

8　心室中隔欠損

8　心室中隔欠損

香澄の実家で一泊した。香澄がいなくて僕一人だけで昔香澄が使っていた部屋で寝るのは奇妙な感じだった。もう八年も主がいないその部屋には、机と白い本棚がありずーっと替えたことのないであろう色の抜けかかったピンクのカーテンが掛かっていた。

僕は布団の中でさっきのやり取りのことを考えていた。義母と実家に到着すると、僕は義父に女の子が無事に生まれたことと、名前を沙耶香（さやか）と付けたことを報告した。半紙と筆を出してきた義父は名前を書いてくれと僕に頼んだ。

「沙耶香…、祐樹君、それはどういう意味があるのかな？」

突然殴られたようなショックに襲われた。意味は考えていなかったからだ。音の印象と姓名判断の画数から決めたとは言えなかった。説明はその場しのぎの出まかせになった。

「えー、沙は、つまり「さ」は女の子らしい音っていうことで、たとえば「さくら」とか「さやこ」とか「さ」はやさしさを表わしていて、耶は木花咲耶姫（このはなのさくやひめ）からいただいた耶です。ですからすばらしい字だと思っています。香は香澄のような綺麗な子になってもらいたくて付けました」

瞬間的によくまとめられたと自分でも感心した。説明をしてる間、義父は何度かうなずいていた。

朝起きると義父は出勤するために家を出るところだった。食事をして、十時頃タクシーを呼んでもらって病院に向かった。義母は午後三時頃に行くというので一人だった。

産婦人科の入院病棟に行くと、部屋に香澄はいなかった。たぶん新生児室に行っているのだろうと思い、そこに向かった。廊下を曲

がって歩いて行くと、新生児室の大きなガラスの前で香澄が茫然としているのが眼に写った。そのガラスの向こうには沙耶香がいるはずだった。

「ねえ、祐ちゃん。赤ちゃんが…、沙耶香が連れて行かれたのよ」

香澄は生気を失っていて普通の様子には見えなかった。

「えっ、連れて行かれたって？　どうしたんだ香澄、しっかりして、ちゃんと説明して…」

「沙耶香が昨日から全然母乳を飲まないのよ。…母乳は新生児室の隣で私が哺乳ビンに絞って…、それを看護婦さんが飲ませるの。でも全然飲まなくって…、さっきお医者さんが来て、新生児科に入院させるって連れて行ったのよ。後で、私と祐ちゃんに説明するから新生児科に来るようにって…、私心配で心配で…、祐ちゃんどうしよう…」

「だからここで僕が来るのを待ってたんだね。じゃーすぐに二人で新生児科に行って話しを聞こう」

その病院は産婦人科の他に、新生児科と呼ばれる問題のある新生児や未熟児、極少未熟児に対応できる設備を備えた診療科が別の棟にあった。そこに向かう途中香澄はずーっとだまっていた。新生児科での受付がすむと、看護婦さんが来て沙耶香のいるところに案内すると言って別の部屋に向かった。

「ここは無菌室なので、これに着替えてもらってから消毒をしてもらいます」

渡されたのは、白い科学繊維でできたガウンと帽子と靴だった。僕が研究所で着用しているクリーンスーツの簡略版のようだった。手を消毒液で消毒して部屋に入ると、未熟児や極小未熟児が入っているプラスチックのケースがずらっと並んでいて、皆心電計やら体温計やらのコードが体についていた。

全員眠っていて泣いている子はいなかった。たぶん泣けるような子はここには来ないのだろう。スタッフは四，五人いたが何人かは医者なのだろうと思った。沙耶香は一番はしの保育器にいた。初め

て近くで沙耶香(さやか)を見た。とても小さいと思ったが、その部屋にはもっと小さな、信じられないほど小さな赤ちゃんがたくさんいた。足のうらにマジックで「さかもと」と書いてあり、鼻から本当に細いチューブが出ていて眠っていた。

「この子のご両親ですか？」

とスタッフの一人が尋ねた。

「はい」

「新生児科の片山です。少しお話をしたいんですけどいいですか？」

そのスタッフが医者であることは話をしていて判った。医者はまだ若い女医さんだった。

「赤ちゃんは、まだ確定はできないんですけれども、聴診器の心音に雑音が入るので、心臓に孔が開いている心室中隔欠損(しんしつちゅうかくけつそん)という病気なのではないかと思っています。血液が正常に流れないので…、そうですね、マラソンランナーのように、ずーっと走っているような状態で疲れきっていて、母乳を飲む体力もないんですよ」

香澄はまだ茫然としていて、医者の説明が耳に入ったのか判らなかった。

「どうなるんでしょうか？」

と僕は尋ねた。

「もう少しくわしく検査をしたいのですが、その前に母乳やミルクを飲めるようにして、少し体力をつけないと駄目なんです。いま鼻からチューブを入れて直接胃に母乳が入るようにしています。だから、お母さんには毎日ここに母乳を届けてもらう必要があるんですよ」

「香澄、香澄、聞いてるかい？」

と僕が言った。

「ええ、聞いてるわ」

香澄の声は生気がなくてか細かった。

「それから、どうなるんでしょうか？」

「検査の結果にもよるので、今これからのことを話すことはできな

いんです。御両親も大変心配でしょうけど、赤ちゃんも頑張っているから私達と一緒に頑張りましょう。きっと大丈夫ですよ」
僕たちは部屋を出て産婦人科の病室に戻った。説明を聞いて僕も香澄も少し正気を取り戻してきた。
「沙耶香はとっても可愛かったな」
「うん、祐ちゃん、私もっとしっかりして頑張るよ」
「心配ない、沙耶香は大丈夫だよ」
何にも根拠は無かったけど、今はそう言うしかなかった。午後にもう一度来るからと言って病院で香澄と別れたあと、仙台の一番大きな本屋に向かった。心配ないと香澄に言ったものの、心配で心配で胸が張り裂けそうだったのだ。医学書のコーナーで小児科や循環器科の専門書を調べてみた。

「心臓に発生した先天性異常は孔の発生と血管配列の異常があり、孔の場合は発生した場所で呼び方や病態が変わる。心室中隔欠損は左心室と右心室の間の壁に孔が開くもので、心臓に負担がかかり心不全を発生する。病状や病後の経過は孔の発生した場所や孔のサイズによるが、孔が小さい場合には自然に閉じることがあるが、閉じない場合には手術をする必要が生じる。感染症に注意が必要で、血流異常から細菌等が滞る場合がありその場合心筋症を併発して危険な状態になることがある」

すぐに命に係わることはなさそうだが、心不全という表現が気にかかった。心不全が死と結びついているような気がしたが、それは死因は心不全でしたという表現をテレビや新聞でよく見たり聞いたりしたからだ。二時頃に病院に戻ると、香澄が連絡したのか義母が来ていた。
僕は本屋で仕入れた知識をかいつまんで説明し、それほど心配することはないと言ったのだが、義母の沈痛な表情を見て予定を一日早めて東京に帰る決意をした。たぶん香澄の実家にもう一泊しても

お通夜のようになってしまい、それはお互い良いことではないと思ったからだ。
「ねえ香澄、さっき研究所に連絡したら明日重要な会議があるから帰ってきてくれって言うんだよ。でも香澄と相談してから、また電話するって答えたんだ」
と僕は嘘を言った。
「祐ちゃん、私頑張れるよ。大丈夫だから…、お母さんもいるし、本当に大丈夫よ」
「そうか、じゃー帰ることにするよ。それから毎日電話してくれ、なるべく9時には帰るようにするからさ。帰る日にちはまた電話で相談しよう。それと沙耶香(さやか)の出生届は帰ってから僕が出すから、必要な書類があれば持っていくよ」
「お母さん二人をよろしくお願いします。僕はいつでも来れますから、何かあればすぐ連絡してください」
僕らは別れ、僕はタクシーに乗り病院を後にした。帰りの新幹線の中で保育器に入っていた沙耶香(さやか)のことを思い出していた。小さくてまだ皮膚は全体的に赤みがさしていて、手のひらは触ったら壊れるんじゃないかと思うくらい小さかった。

9　仙台

9　仙台

朝七時ころ家を出て、首都高速を走って東北自動車道に入ったのは八時ごろだった。土曜日の午前中はトラックが多かったけど運転は誠一郎にまかせていたから楽だった。途中で食事をしたりしたから、私と誠一郎が仙台に着いたのは昼過ぎになった。

誠一郎の実家は東北自動車道の仙台宮城インターで降りて二十分くらい走った住宅街にあった。午後になってから、私たちと誠一郎の両親とで市内にある小田家のお墓参りにいった。水を掛けて御花を供え、線香を手向けると、誠一郎のお父さんがとても嬉しそうだった。

「御先祖様、どうか私と誠一郎に子供が生まれますように、お力をお貸しください」

私は手を合わせて心の中でお願いをした。

翌日の日曜日は、誠一郎と二人で実家の周りを散歩することにしていた。私たちは実家から歩いて十分くらいとところにある、彼の小学校と中学に向かった。

「ねえ、この辺ずいぶん新しい住宅が建ってるけど、小学校のころはどうだったの？」

と私は誠一郎に尋ねた。

「このあたりは昔は全部田んぼだったんだけど、俺が小学校の頃には住宅地の造成が始まっていて、半分位は埋め立てられていたな。家はまだ少なかったけど、家の建ってない更地がたくさんあった」

と誠一郎は辺りを見回しながら答えた。

「ねえ、小学校って一学年何クラスあったの？」

「少なかったなぁ。たしか二クラスしかなかったよ。一クラス三十

五人くらいだから学年で七十人くらいだな」
「そんなに少ないと他の学年の子とかも良く知ってたりするのかなぁ？」
「いやそんなことは無かったな。近くに住んでる子なら知ってたけど、そうじゃなければ全然知らないよ」
「ねえ、可愛い子とか好きだった子とかはいなかったの？」
と私は言った。私は誠一郎の子供のころの事をほとんど聞いていなかった。勝手な想像ではあったけれど、どこかで彼と香澄さんに接点があるような気がして、それを聞き出したかった。
「ああ、いいなって思う子はいたけど、そんな初恋とか、そーいうレベルじゃなかったな」
どうやら小学校時代には誠一郎と香澄さんに接点はないと思った。
「小学校の時の一番の思い出ってなにかしら」
「一番印象に残っているのはいやな思い出だよ。たぶんこの辺のあたりなのかなあ、今は宅地だけどこの辺はまだ田んぼで、その間を舗装されてない道路が走っていたんだ。僕が四年生くらいの時に友達と遊んでいたら、六年生が二人来ておもしろいことをやろうって誘ったんだよ。その二人は自転車で来ていたんだけど、その内の一人が田んぼで大きなトノサマガエルを二匹つかまえてきたんだ。それからいやな事が起こった」
誠一郎はそう言うとすっかり黙ってしまった。
「ねえ、どうしたの、つづきを教えてよ」
「あんまり聞かないほうがいいと思うけど」
と誠一郎が言った。
「何よ、言い出したんだから言ってよね。じゃないと聞くまで口きかなくなるから」
「判ったよ…、聞いてからいやな気分になっても知らないからなー。トノサマガエルを捕まえてきたそいつらの一人がカエルを地面に叩きつけたんだ。たぶん手加減したと思うんだけど、カエルはなんか失神したみたいに動かなくなった。それから俺たちに命令したんだ。

『いいか、この道はたまに車が通るから道の端に隠れていて、車がきたらタイヤの下めがけてカエルを投げろ』って言ったんだ」
「ひどい話ね。それで、やったのね」
「ああ、六年生には逆らえないし、それにうまくタイヤの下に入るとも思えなかったからね。でも俺の投げ入れたカエルはタイヤの下敷きになってグシャっと破裂したんだ。もう怖かったけどそれだけで終わらなかった。相棒はカエルを投げ込むことができなかったんだ。そうしたらそいつらが、自転車で踏み潰せって命令したんだよ。相棒に。あいつは泣きながら自転車をこいで、カエルは俺の目の前で自転車に轢かれて破裂した。それが小学校での一番の想い出なんて悲しすぎるよなー。あいつともずいぶん逢ってないけど、どうしてるかなあ」
　私たちは、彼の出身小学校を離れて、十分ぐらい歩いたところの中学に向かった。その中学も住宅地にあり、比較的綺麗な四階建の校舎だった。でもきっとさっきの小学校と同じように、十五年くらい前には、まわりには田んぼや畑が結構あったのかもしれないと思った。
「結構綺麗な校舎じゃない」
「たぶん、これは最近立て替えたんだよ。もっと汚い鉄筋の校舎で建ってる場所もここじゃなかったから」
「ここでは一学年何人くらいいたの？」
「ここは三つの小学校から集まってきたから、俺たちの学年は五クラスだった。たぶん一学年二百人くらいだと思うな」
「ねえ、初恋の人はいたのよねぇ？」
「ああ、そうだね、中学では確かにいたよ」
「ねえ、どんな子だったの？　告白なんかしたの？」
「三年のときに同じクラスだった子だよ。石川絵梨子っていう名前だった。その話も聞きたいのかい？」
「ええそうよ。せっかく仙台まで来て、こうやって誠ちゃんの思い出の地を散歩してるんだから、いろいろなこと聞きたいじゃない」

何とか香澄さんとの接点を見つけるまで聞きつづけたかった。
「そうだな、せっかく来たんだからなー。石川絵梨子は身長が１６４～５?くらいで、すらっとした体型でバスケ部だったんだ。明るくてさっぱりとした性格だったし頭もよかったからあいつのことが好きだっていう男子はけっこういたと思う。顔は…、そうだな、今テレビに出てる中では木村カエラに似てると思う。俺と石川は二学期の間、席が隣でとても仲良くなった。俺は彼女を本当に好きになったけど、でもそれだけさ。告白もしてないし、卒業してから逢ったこともない。あの子は女子高に行ったからね。その後どこの大学にいったのかも知らないんだ」
「じゃー片思いだったってことよね。ねえ、誠ちゃん中学の時バレー部だったって言ってたじゃない。部活の後輩とかで気に入った子とかはいなかったの?」
「特にいないな。だいたい男子と女子は練習を別々にやるから、部活の後輩の女子なんて名前も知らないよ」
後は高校しかなかったが、それ以上の詮索はできなかった。誠一郎の高校は駅で二つほど離れたところにあって、散歩で行けるような距離ではなかったからだ。もし車で行こうと言ったならば、まるで誠一郎の過去を詮索しているようになる。実際にはそうでも、彼にそれを気付かれるのはいやだったのと、それに、誠一郎と香澄さんが知り合いだなんて、ただの空想にすぎないかもしれないと思ったからだ。私達は実家に戻ると、その日の午後早くに仙台を後にした。二人で仙台に行ったことは有意義だったし、とても楽しかった。でも私はこの時の体験をもとに誠一郎にひどいことを言うことになる。

10　退院

10　退院

香澄は夜九時になると電話をかけてきたから、僕も九時にはマンションに帰るように生活していた。特に状況は変わらなかったけど、沙耶香（さやか）はチューブを使って母乳を少し飲めるようになったと喜んでいた。香澄の入院日数は予定とおりだったが、沙耶香は香澄と一緒には実家に戻れなかった。沙耶香が退院したのは香澄が退院してから一週間後だったから、香澄は毎日母乳を搾（しぼ）って病院にそれを届けていた。

「ねえ、祐ちゃん、私達いつそっちに戻れるかな？　先生が、戻る前日に詳しく診察したいから予定を聞かせてほしいって、なんでも検査をする装置の予定を決める必要があるからなんですって。検査は平日の午後に行うのと、そのときは二人で来てくださいって」

電話口の香澄の声は平静な感じがした。

「じゃー二十八日の金曜日にしよう。その日は車で迎えに行くから、たぶん朝六時ころ出れば遅くても十二時すぎには病院に着くと思う。それから、僕はその日に三人で帰りたいんだ。早く三人で暮らしたいから」

と僕は言った。

「わかったわ。父と母にはそう言っとくから」

「沙耶香はどう？」

「沙耶香は毎日よく寝るわ。ほとんど寝ていてたまに眼を開けるの、哺乳ビンで母乳を飲むんだけど、一回に１０ｃｃとか２０ｃｃとかそれくらいしか飲めないわ。体重は生まれたときより減っちゃったけどそれはよくあることらしいわ。それと最近黄疸（おうだん）と乳児湿疹（しっしん）ができてきたけど、それは普通のことみたいなのよ」

「じゃー母乳を飲む量が少ないってこと以外は普通なんだね」

「ええそうよ。それから、今日姉が遊びに来て沙耶香を抱いて、とっても可愛いって言ってくれてそれがとっても嬉しかったわ」
「皆が沙耶香を応援してくれている。千葉の親爺とお袋も帰ってきたら皆でお宮参りに行こうって言ってたよ。沙耶香の守護霊や先祖の霊もきっと守ってくれると思うんだ」
「そうね。きっとそうよ」
香澄と沙耶香を迎えにいく日には、僕は朝六時に車でマンションを出発した。六時台の首都高速はすいていたから一時間で都内を通過して、七時には東北道に入っていた。途中のサービスエリアでホットドッグを食べて、順調だから香澄の実家に迎えに行くと電話で連絡し、仙台宮城インターで降りて三十分ぐらい走った住宅街にある香澄の実家に到着した。
実家のすぐ近くには香澄が通っていた高校だと聞いたことがある宮城仙台北高校があった。義父は会社に行っていたから、義母にお世話になったお礼を言い、逆に、僕の両親からお礼の品が届いたことに対してお礼を言われた。
昼食をとってから、僕と香澄と沙耶香の三人で病院に向かった。病院からは実家に寄らずに都下にあるマンションに向かうので、荷物はたくさんあった。沙耶香は小さな竹で編んだような籠(かご)の中でオクルミに包まれて眠っていた。病院の新生児科で受け付けを済ませると、最初に説明をしてくれた女医さんが出てきて、検査室まで案内してくれた。部屋の入り口には超音波検査室と書いてあって、中に入るとそこは薄暗くて女医さんの他にもう一人年配の男性がいた。
「沙耶香ちゃんをここの台の上に寝かせてください」
と女医さんが言った。
名前で呼ばれるのは当たり前なのだが、最初に会ったときは赤ちゃんと呼ばれていたから少し不思議な気がした。沙耶香は台の上でオクルミを脱がされて裸になっていた。空調で温度管理されているから寒くはないのだろう、沙耶香は動かないで眠っていた。
年配の男性が照明スイッチをコントロールすると部屋の照明は落

ちて、僕等の周辺は装置のディスプレイからの光しかなくなった。女医さんが超音波の発信と受診をする棒状のソナーを沙耶香の胸にあてて、角度をいろいろと変えながら映像を探って行く。ときどき記録用のスイッチが押された。僕と香澄も映像を見ていたが、僕も、たぶん香澄も何がどうなっているのかは判らなかった。

「７ｍｍだな」

年配の男性の低音でこもった声が部屋に響いた。それは裁判所で判決が言い渡された瞬間のようだった。「被告人は無罪」「被告人は７ｍｍ」僕等は被告人のような気持ちでいたのかもしれない。ただ７ｍｍがどのような意味を持っているのかは判らなかった。

「えーと、いいですか。映像で説明しますけど…、ほら、ここの部分が血流に異常があるところなんです。ここは右心室と左心室の間にある分厚い壁で、孔が無ければこのような流れは見えないんですよ。聴診器や心電図でも判っていたんですけど、心室中隔欠損（しんしつちゅうかくけっそん）に間違いないですね」

女医さんが説明してくれたが、どこがその孔なのか良くは判らなかった。画面上にスケールが現れると説明はさらに続いた。

「このスケールを使って孔のサイズを計測するとだいたい７ｍｍなんです。それで、７ｍｍの大きさのことなんですけど、すぐに手術をする必要があるかどうかは微妙な大きさですね。たぶん、すぐってことはないと思うけど、でも適当な時期に手術が必要になるとは思うんですよ。それは、体が少し成長してからって意味ですけど、なぜかっていうと、手術する場合にも心臓の大きさが小さい場合より、ある程度の大きさになったほうがやり易いからなんです。それに手術に耐える体力の関係もあるから」

と女医さんが言った。

「いつごろ手術をするんですか？」

「今決めるわけにはいかないけど、小学校に入る前に手術をするのが多いですね。本当は沙耶香ちゃん私達がずーっと面倒みたいんですけど。あー、遅れたけど紹介するわ、こちら循環器科の安藤先生、

こういう心臓の手術を担当されているの」
安藤先生が引き継いだ。
「あなた達はもう帰られるということなので、紹介状を書きます。ですから、その紹介状を持って病院に行かれてください。奥さんのお話では近くに県立小児医療センターがあるということですので、そちらへの紹介状を書きます」
「そうしたら、沙耶香ちゃんと一緒に廊下で待っていてください」
沙耶香を竹籠に乗せて、僕等は廊下に出た。僕はショックではなかった。手術の必要性は説明されたけど、命が危険であるとは言われなかったからだ。香澄も落ち着いていた。そうして僕等は紹介状をもらってから、仙台を後にして車で帰路についた。一人で来て三人で帰る、そのことがとても嬉しかった。
僕は東北自動車道でも首都高でもあまりスピードを出さずにゆっくりと走ったので、家まで結構時間がかかり、日は落ちてすっかり夜になってしまった。そして、もうまもなくでマンションに到着するころだった。
「ねえ香澄、心配することないよ。手術はするかもって言われたけど、命が危険だとは言われなかったんだから」
「そうね、祐ちゃん。沙耶香は大丈夫だと私も思う。ただ、祐ちゃんに一つだけお願いがあるの」
「うんいいよ。言ってごらん」
「あの、私の卵巣が無いことを言い当てた霊能者に会ってもらいたいの。私達三人の写真を見てもらってほしいのよ」
香澄の声は真剣だった。

１１　浅間神社

１１　浅間神社

俺と恭子が仙台から戻ってきてしばらくすると、三ヶ月ほど休んでいた精液検査に行こうと恭子が言い出した。二人の実家に行ってお墓参りにも行ったから、きっといいことがあると恭子は信じているのだろう。でもそんなことで科学的医学的な結果が変わるんなら医学も医者もいらないだろうと思ったけれど、それは言わないで恭子の意思を尊重することにした。

でも、検査結果は以前と変わらなくて、精子数は４０００～５０００、運動する精子の割合５０％、異常な形をした精子の割合７０％で、精子が少し元気になった他は一緒で受精が難しいレベルであることに変わりはなかった。恭子の期待は打ち砕かれ、彼女はすこしがっかりした様に見えた。

その晩、僕等はセックスをした。もちろんコンドームなしでだ。行為が終わった後で二人で布団に包まっていると、恭子が話しだした。

「ねえ、誠ちゃん、気になってることが一つあるのよ」

「なーに、何でも聞いてやるから言っていいよ」

「でも、とっても言いにくいことなのよ。誠ちゃんが聞いたら怒るだろうって心配なの。きっと怒るだろうから言えないのよ」

と恭子が言った。

「えー、なんだよ、子供のこと…、不妊治療のことかい。まさか別の男の精子で子供を作るって言うんじゃないよなぁー。俺まだそんなこといいなんて言えないからな」

と俺は少しぶっきらぼうに言った。

「ちがう。私、誠ちゃんの子供しか欲しくないからそんなこと言わないよ」

「じゃー、何なんだよー」
俺は少しいらついていた。検査結果に対してではなくて、恭子ががっかりしていることに、いらついていた。
「ねえ、怒らないで聞いてよ」
「わからないよ。内容によるからさ」
「じゃー話すけど、怒ったら泣くからね……。仙台に行ったときに、いやな思い出の話をしたこと覚えてるわよね。あれから、その話を思い出しながら、もっといやなことを想像したのよ。その内容が酷いから言いづらいの」
「いいよ。怒らないって約束するから言えよ」
と俺は冷静な感じで言った。
「あなた達カエルを破裂させたのよねぇ？　それってひどい事なのよ。まあ無理やりやらされたんだからしょうがないけど、やられたカエルからしたら、あなたたちは全員許せないのよ」
「ああ、そうかもしれないな。それで…」
「うーん、だから言いづらいけど…、つまり、カエルの子供ってオタマジャクシじゃない。だから…」
「わかった。もうそれ以上は言うな。そこからは俺が言う。だから、これはお前が言ったんじゃなくて俺が言ったんだから…、だから、俺はお前のことを怒ったりはしてないんだからな」
俺は冷静さを保とうと意識していたのに大きな声を出していた。
「誠ちゃんごめん」
「俺がカエルに酷いことをしたから…、だから俺の精子がみんな奇形なんだ。きっとそうなんだろー。オタマジャクシと精子は似たような形だからな。報いを受けてるんだ」
俺の目には涙が滲んでいた。そして恭子も泣いていた。
「ごめん誠ちゃん…、ごめんね。そんなこと言うつもりはなかったのよ…、ただ…」
「ただって？」
「もしそうならば、方法があるんじゃないかって最近思うようにな

ったのよ」
「どんな方法が…、カエルを家でかって可愛がるとかか？」
それからの彼女の話は信じられないような話だった。その話を聞く前に、俺は落ち着きを取り戻すためにシャツとトランクスをはいて布団から出て、缶ビールを取りに行った。寝室に戻ると恭子にも一本缶ビールを渡して二人で飲んだ。
「ねえ、過去に戻ってそれを修正するのよ」
「えー、過去に戻る？？？」
「誠ちゃん、一年くらい前に出口のないトンネルの話をしたじゃない。私最近あの話を思い出したのよ。あの時、誠ちゃんは、あの奇妙ないでたちの女の人から過去に行く列車の話を聞いたって言ってたじゃない。そうでしょ」
と恭子は冷静な口調で言った。
「なあ恭子、お前あの話は聞きたくないって言ってたじゃないか」
「そうよ。でもきっと私たちにとって大切な話だったのよ。この話を聞いた人はいつか過去に行くことになるって、そう言われたのよね？」
「ああ、そうだ。あの時あの上品な奇妙な服装の女の人は、確かにそう言った。よく覚えてるよ」
「そうでしょう。でも私思ったのよ。きっとあの人は誰にでもこの話をする訳じゃないの。きっと必要な人だけに話すのよ。だから、誠ちゃんは過去に行く必要があるのよ。そして蛙の件を清算しなければならないんじゃないかって」
恭子の声は自信に満ちていて断定的だった。そうしなければいけないような響きがあった。
「なあ、恭子、お前本気なんだな？」
俺の声も真剣になっていた。
「そうよ、本気なのよ。ただ、誠ちゃんがいやならばそれでもかまわないわ」

「いや、俺は行ってみるよ。たしか三駅下ったところにある神社に、真夜中の十二時に行けって言われたと思うんだ」

それから一週間たった土曜日の夜に、俺は一人でそこに向かうことにした。

地図で調べると確かに三駅下った駅から５００ｍくらい離れたところに神社がある。地図のコピーを持ち、夜十一時の下り電車に乗って三駅離れた駅で降りた。時間はたっぷりあったのだが、十二時つまり午前０時に遅れる訳にはいかないから、駅前のマクドナルドでコーヒーを飲んで、神社の近くで十二時になるのを待った。

神社の入り口には鳥居があって、その先は石畳の路が奥につづいているようだが、暗いし中の様子は判らなかった。鳥居のところに、岩井浅間神社（せんげんじんじゃ）と書いてあった。腕時計で丁度十二時に鳥居をくぐった。１０ｍほど歩くと動くものに反応するらしい照明が石畳を照らした。石畳は１００ｍくらいありそうで、その先のほうにも照明がついたことが判った。

歩いていくと石畳の終わりのところに別の鳥居が在って、その先には本殿が在った。本殿の右側に建物があってそこに老人が立っていた。白髪に白い顎鬚（あごひげ）を蓄えて白い作務衣（さむえ）のようなものを着ていて、背は高くて背筋が伸びていた。かなりの歳なのだろうとは思ったが暗かったからよくは判らなかった。この神社の神主なのだろうか？

この建物に住んでいるのだろうか？　訳が判らなかったが、俺は老人のほうに向かって歩いて行った。

「あのー、夜分遅いのですが、お参りはできるでしょうか？」

と俺は老人に尋ねた。

「神社にこのような時間に来る者はおらんのじゃが、お主は丁度午前零時に鳥居をくぐったようじゃから、こちらに案内して進ぜよう」

老人は建物の木戸を開けて先に入り、俺も続いた。そこは普段は御札や御守りやおみくじなんかをおいてある建物のようだが、老人はそこよりも先の部屋に俺を案内して座布団に座るようにうながし

た。部屋には古びたあまり明るくない蛍光灯が一つ点いていた。
「特に言わんでも、お主の目的は判っておるがのー、念の為じゃ、何用でこのような時間に訪ねられたか訳を聞かせられよ」
老人は俺に尋ねた。古い言いまわしだなと思った。
「えーと、ある人に聞いてきたんです。この時間にここに来れば過去に行けると」
「過去に？　ほほー、やはりそうじゃな。たしかにお主が聞いてきたとおりじゃが、誰でも行けるというわけではないのじゃ」
「はぁー、すると何かやらなければいけないのでしょうか？」
「いや、何もすることはない。ただお主の名前と生年月日を、もし結婚しているのなら奥さんの名前と生年月日も一緒にこの紙に書くのじゃ」
俺は渡された半紙に二人の名前と生年月日を書いて老人に渡した。
「しばらくここで待っておるのじゃ、そう十分ぐらいで戻れるじゃろう。よいかのーその間この部屋から出るではないぞ」
と白い顎鬚の老人は命令口調で言った。
「はい。わかりました」
と俺は答えた。
老人が出て行くと、俺は完全な静寂に包まれた。時間のたつのがものすごく長くなったように感じ、もう老人は帰ってこないのではないかと思った。もしかしたら、老人がいたと思ったのは幻で、ここに居ることを誰かに見つかったら家宅侵入で警察が呼ばれるのではないかと考えていると、老人は目の前に戻っていた。
「見つけてきたぞ、過去に行くための手形をなぁ」
老人は俺の前に１５ｃｍ四方くらいの色紙を置いた。そこには、一九七八年六月八日誕生、桜井恭子と妻の旧姓が書いてあり、朱肉の小さな手形が押されてあった。手形の両脇には、桜井省吾、桜井洋子と書いてあったが、それが妻の両親の署名であることをすぐに理解した。字はすべて毛筆で書かれており父親の署名以外はすべて母親が書いたもののように見えた。彼女の母親の字はとても綺麗な

字だった。
「これは、お主の奥さんの恭子さんが生まれたときに、お宮参りでこの神社に納めたものじゃよ」
「はぁ、…ただ…、それと僕が過去に行くのと何か関係があるんでしょうか？」
「そうじゃ、お主は恭子さんと結婚したからこれを使って過去に行けるのじゃ」
俺には何がどう繋がるのかがよく理解できなかったのだが、とりあえず次の質問をしなければと思った。
「それで、これからどうしたらよいのでしょうか？」
「まあそう急くでない。順番に説明するからよく聞くのじゃ。まず最初にこの神社のことについてじゃ。この神社は岩井浅間神社と呼ばれておるが、それは岩井町にある浅間神社だからじゃ。語呂合わせでお祝いとかけると、祝い浅間神社になるから、子供が生まれたときのお宮参りでは結構有名なんじゃよ。ところで、この神社に祭られている神様を知っておるかの？」
「あのー、浅間様って言う神様ではないんですか？」
俺は良く判らなかったのだが適当に答えた。
「よいか、浅間神社がお祭りするのは、木花咲耶姫（このはなのさくやひめ）様と呼ばれる神様じゃ」
「このはなのさくやひめ？」
どこかで聞いたことがあるような気がしたが、どこで聞いたのかは思い出せなかった。老人は先を続けた。
「浅間神社の本宮は富士山にあるのじゃ。だから富士山のよく見えるところには浅間神社がたくさんあるのじゃよ。この場所も周りにビルが立つ前は綺麗な富士山が見えたのじゃ。よいかな富士山の八合目から上は浅間神社本宮の御神域なのじゃよ」
みんなが登っている富士山が御神域だと言われて、すこし意外な感じがした。面白い話だと思ったのだが、それよりも、これから先のことが心配だった。

「はぁー、それで、あのぉー、今日は過去には行けないのでしょうか？」
「あぁ、そろそろその話をしようと思っとったとこじゃ。えーまず、お主は今現在ここに居て、そして過去に行くのじゃな…、そして到着した過去で何かを行い現在に帰ってくる。ふーむ、よいか、これから大切なことを言うぞ。過去に戻って何かをしても、現在からみた過去の出来事はいっさい変わらないのじゃ。つまりもう現在までの過去を変えることはできん。だが、現在から先の未来は変わるのじゃ、だが誰にもどう変わったのかを知ることはできない。よいか、わかりにくいから例えてやるぞ。明日の朝八時にお主の腕にオスの蚊がとまるとする。もしお主が過去に行って何かをすると、明日の朝八時にお主の腕にメスの蚊がとまることになるかもしれん。だが変わったことは神以外にはわからんから、ただ未来は漠然と流れていくだけに見えるじゃろう。よいか、過去に行って何かを行ってもそのくらいの変化しか起きないのじゃ。だが、侮ってはいかん。風がふけば桶やが儲かるからの、たとえばオスの蚊がメスに変わったせいで、お主が血を吸われて日本脳炎になって死ぬかもしれんからのー。つまり、変化自体は小さくても影響が大きい場合もあるということじゃ」
「はぁー、でも過去を変えに行くのだから、過去も変わるんじゃないんですか？」
「確かに過去を変えに行くのじゃ。でも、考えてみなさい、その変わった過去を基点に全てのことが変わったら大変じゃろうが。つまり、そのことで確定している現在を変えることはできないということじゃ。影響は未確定な将来のみに現れるのじゃ」
「はぁー、何となく判りました。それで過去に行くには具体的にはどうするんですか？」
「もうじき零時三十分になるのう…、よいか、その手形の付いた色紙を持って、お主が下車したこの駅で深夜の一時に一番ホームの先端で待つのじゃ。その色紙を持った者は誰にも認識されない透明人

間のようになるから安心するがよい。そして三両編成の列車がくるからそれに乗るのじゃ。その列車もお主以外の誰にも見えないから大丈夫じゃよ」

「それで、乗ってからはどうするんですか？　何か、いや誰かに、いつの時代に行ってくれ、とかの指示とかお願いをするのですか？」

「よいかな、その列車にはお主以外は乗っとらんから指示など聞くやつは誰もおらん。その列車はお主の過去にさかのぼり、お主の深層意識の中で最も行きたくないところで止まるはずじゃ。それは良く覚えている過去かもしれんし、もう完全に忘れている過去かもしれん」

「そこで降りたら、過去をどうやって変えるんですか？」

「そこには過去のお主が居るはずじゃ。なにをやっている場面かは判らんが、必ず過去のお主は居る。その場面での行動は過去のお主の意思で全てが決められたはずじゃ。たぶんお主はその場面を完全に思い出すじゃろう。そしてその場面でお主は過去の自分と一体化することができるはずじゃ。過去の自分と一体化した後では、その場面での行動は、新しく来たお主の意思で決めることができるのじゃ。たぶん変えられるのは少しの時間だけじゃ。気がついたときにはお主は駅に戻っているから、それからこの神社に戻って来て、ここで休みなさい。始発電車が動く時間になったらば、なるべく早く誰にも見られずにここを立ち去るのじゃよ」

俺は老人にお礼を言ってから神社を出て駅に向かった。手にはあの手形の押された色紙を持っている。　駅は最終電車が出た後らしくホームの照明は落とされていたが、改札付近はまだ明るくて駅員が一人最後にやらなければならないと思われる作業をしていた。

俺は老人の言葉を信じていたが、自動改札が反応する可能性もあると思い、自動改札ではない改札を通った。駅員は気づかなかった。俺は暗い階段を降りて一番ホームで過去行の列車を待ちながら老人の言葉を思い出した。老人は、もうその手形を神社に返す必要はないから手元において大切にすること、過去には俺と恭子が一回づつ

行けること、恭子が行くときには神社にくる必要はなく一人で同じ深夜の一時に手形を持ってこのホームで待てばよいことを話してくれた。

腕時計を確認すると深夜の一時で、その列車は音もなくホームに入ってきて僕の前で停車した。見たことがないくらい古い感じの茶色の車両で、扉は自動はなく手動だった。手押しでドアを開き、中に入ると誰もいないのに照明は煌々と輝いていて、すぐに音もなくすべるように動き出した。老人が言ったように俺の他には誰もいなかった。外の景色はいつもの通勤電車から見るのと同じように見えたが、きっと外からはこの列車は見えないのだろうと思った。列車が見えた恭子の友達はきっと特殊な能力があるに違いない。そんなことを考えている間に列車は俺達の住むマンションがある駅を通過した。もうまもなく、出口のないトンネルだった。

１２　霊能者

１２　霊能者

香澄の頼みを実現するために妹に連絡し、そして今の状況を簡単に説明した。

娘の沙耶香が心室中隔欠損で、僕と香澄がそれを心配していている事、香澄の卵巣が一個ないことを言い当てた霊能者に沙耶香の将来を見てもらいたいと思っている事を伝えた。妹は、霊能者は旦那の友達の知り合いだから、会えるように頼むけど、会えるまでに少し時間がかかるかもと言った。

しかし、その一週間後には、二人で会えることになったと妹から連絡があった。待ち合わせは夜八時に新橋の烏森口の改札だということで、体重が１２０ｋｇくらいある大柄な人だから、見れば必ずわかるからと妹に言われた。つまり相手は僕を知らないので、僕が見つけなければならなかった。

その当日、僕は、僕と香澄の結婚式の写真と退院後に香澄が実家で写した沙耶香の写真を持って、改札で周囲に気を払って待っていた。すると、そういうスーツがどこで売っているのか解らないような、大きなピンクがかったベージュのスーツを着た人物が僕に近づいてきた。

「あのー、失礼ですけど、古河さんですか？」

「ええ、そうです」

「初めまして、私は坂本祐樹といいます。今日は、おいそがしいところを有り難うございます」

「あぁ、聞いてますよ。柳井美雪さんのお兄さんですよね？」

「はい」

簡単な挨拶をすませると、古河さんは食事に行こうと言った。妹

から聞いていた。
「古河さんは本物の霊能者なの、だから霊能力で守護霊や将来を見てもそのことでお金は一切受け取らないそうよ。なんでも古河さんについてる守護霊にこっぴどく叱られるからなんですって、そのかわり合う時間にもよるけど食事はおごるってことになってるの」
僕らは新橋駅近くのビルの地下にある、食事もできる喫茶室みたいなところに入った。少し薄暗かったので、周りのことは気にならなかった。僕はカルボナーラを、彼はイタリアンハンバーグステーキとライスの大盛りを頼んだ。僕らは食事をしながら、今どんな仕事をやっているのかとか、景気はいいかとかそんな世間話をした。
古河さんは新橋の近くにある出版社で働くサラリーマンだった。なんでもこのような霊能力は二年くらい前に突然現れたそうで、発現のきっかけもよく解らないとのことだった。
僕は食後のコーヒーを飲みながら本題を切り出した。
「実は娘の沙耶香が、まだ生まれて一ヶ月くらいなんですけど、心臓に欠陥を持って生まれてきたんです。心臓の右心室と左心室の間の壁に孔が開いていて、血流が正常ではないんです。今日はそのことで、娘の将来を見ていただきたくて来ました」
僕は、僕と香澄の結婚式の写真と娘の写真をテーブルの上に出した。心室中隔欠損の話は最初にするつもりだった。本当は、そのことを霊能者が言い当てる事ができるのか？　そのことに興味があったのだが、時間が掛かるかもしれないし、そんなことは今日の目的ではなかった。
「ええ、判りました。あなたが私に見てもらいたい内容も。でも、その前にあなた達の前世とあなた達を守護されている霊についてお話させてください」
古河さんは二枚の写真を手に持つと、まじまじと眺め始めた。
「まず、あなたの前世ですけど、あなたは中国に生まれていて宮廷料理の料理人をやっていました。今あなたが科学に興味があって、いろいろな物質を組み合わせたりする実験をやっているのも、前世

で食材を組み合わせて新しい料理を考えていたことと、無関係ではないんです。それからあなたの守護霊ですが、その方は日本でお城の門番をやっていた方です。正義感が強くて剣術の腕も立ったようですね。ですからあなたの現世での課題は、殺生をしないことなんです。あなたは前世で、たくさんの生き物を殺しましたしからね」

と古河さんはよく透る低い声で言った。

「はあ、とても興味深いお話です」

と僕は答えた。

「奥さんは中東に生まれた女性でした。お子さんが五人くらい生まれたのですが、庭園造りが趣味で、それに熱中しすぎて晩年は孤独だったようですね。彼女の現世での課題は、人付き合いを活発にすることなんですよ。奥さんには見かけによらず積極的なところがありませんか？　もしそうならば、それは現世での課題を解決しようと努力しているからなんですよ」

「でも、現世での課題って自分でわかるものなのですか？」

「もちろん正確には判りません。しかし守護霊や指導霊が一生懸命伝えようとしていますから、行動に反映されることはあるんですよ。それに霊感の強い人ならば、守護霊様や指導霊様の声を直接聞くことだってあるんです」

僕は娘の沙耶香のことを早く聞きたかった。

「それで、娘さんですが、たぶんタイとかインドネシアとかその辺の東南アジア方面の国で生まれているようですね。たくさんの兄弟がいた中の長女で、兄弟たちのめんどうをよく見ていたようです。とても優しい性格なのですが、物事を悲観的に見る傾向があって苦労したようです。だから、その悲観的な捕らえ方を直していくのが課題なんです。守護霊様は二人見えますね。たぶん、心臓に問題があることと関係があるようですね。一人は何代か前の御先祖でおばあさんの姿です。たぶん…、母方の先祖のように見えます。もう一人は袴姿の女性ですが血は？がっていないようですね」

「それで、娘の将来は見えるのでしょうか？」

僕は今日来た本来の目的について尋ねた。やっとここまでたどり着いたかという感じだった。そして、さっき古河さんが、写真を見ていると前世や守護霊や未来のことが映像をみるように頭に浮かんでくると説明したことを思い出していた。

「ええ、二つ見えますね。まずあなたの知りたいことで最も重要な点ですけど、娘さんは心臓の欠陥が原因で亡くなることはありませんよ」

それは僕の聞きたかった結論の一つだった。

「それから、娘さんはとても良いお医者さんと巡り会います。そのお医者さんのおかげで娘さんはだいぶ良い状態になりそうですね。それと、たぶん小学校に上がる前だと思うんですけど、家族が集まって相談をしている映像が見えますね。両親とお爺ちゃんお婆ちゃんですかねえー、皆で手術の相談をしているように見えますね。たぶん、小学校に上がる前に手術を受けることになると思いますよ。その二点ですね僕に判ることは」

それで十分だった。いや十分すぎるほどで、僕のこれまでの重苦しい気持ちは、ほとんどわからないくらいに軽くなった。とても嬉しかった。それなのに、特に聞かなくてもいい質問をした。

「古河さん、僕は今日ここに来て本当によかったと思っています。お話を聞いて本当に心が軽くなりました。古川さんの見ている将来のことは外れることもあるのでしょうか？」

言った瞬間「しまった」と思ったのだが、覆水盆に帰らずだった。

「僕は自分の頭に浮かんだ映像を伝えるだけなんですよ。なるべく具体的に伝えるようにしているのですが、解釈の余地についてはあまりない場合もあるし、かなりある場合もあります。映像を伝えるだけで勝手な解釈はなるべくしないようにしているつもりなんです。それに映像が将来をさしているのかさえ不明な場合もあるんですよ。でも、あなたの娘さんはまだ生まれて一ヶ月くらいですから、見えた映像は間違いなく将来のことでしょう。外れたかどうかは統計を取ったこともないから不明ですけど、たくさんの人から逢ってほし

いと言われています。それが全てだと思うんですよ」
「すみません。馬鹿のことを聞いてしまって、でも信じてください。僕は今日あなたに会えたことを本当に感謝しています」
僕らは新橋駅で別れた。別れ際に古河さんは、また聞きたいことがあればいつでも連絡してくださいと人懐こそうな笑顔で言った。
マンションに帰ってから香澄に話の内容を伝えると、彼女は本当に嬉しそうな顔をした。一週間後に県立小児医療センターに行く予定が入っていた。

13　過去

13　過去

トンネルに入ると列車内の照明は全て落ちて真っ暗になった。列車は滑るように移動していて音をまったくたてなかったから、完全な暗黒に包まれたように感じたが、それは少し違っていた。

しばらくして目が暗闇になれると、トンネルの外にチラチラと映像が見えるような気がして、目を凝らしてガラス越しに外を見た。最初に見えたというか認識した映像は、恭子と初めてであった八方尾根でのスキーの場面だった。ガラスの外に見えているのは紛れも無く俺の過去で、その映像はテープを逆回転させるように過去に遡っているように思われた。過去の映像がフラッシュバックしているのだ。

俺は正面に向き直って座りなおし目を閉じて、到着した過去で何をするべきなのかを考えた。

あのカエル達に酷い仕打ちをした場面で俺には何ができるのだろう。とても歯の立ちそうに無い六年生に、「俺はそんなことはやらない」ってきっぱりと拒否することができるのだろうか。拒否したら六年生にひどい目にあわされるかもしれないし、それに友達はどんな反応をするのだろうか。「あいつら六年生には逆らえないから、いやだけど、カエルを潰さなくちゃいけないんだ」って言うかもしれない。

でも俺は覚悟を決めていた。精子の奇形がカエルに酷いことをした報いだというのなら、とにかく断固として拒否しなければならない、六年生と喧嘩になって、奴等に殴られてもその決意だけは守り抜くのだ。俺はそのためにこの列車に乗り込んで過去に向かっているのだから。

やがて、俺の背筋に一瞬の悪寒が走った。それは、暗闇で音もな

いのに列車が止まったことを俺に知らせていた。あの手動の扉を開いたならば、そこには俺が立ち向かわなければならない過去が存在しているはずだった。俺は席を立ち、暗い列車の中を扉のある方向に向かった。

扉を開けてすぐに気づいたのは、そこが田んぼや田んぼに囲まれた住宅地ではないということだった。　ここは、あの仙台の、小学校の近くの田んぼなのだろうか？　列車は確かに止まっていて、俺は手摺階段を伝って地面に飛び降りた。

俺は神社で会った老人の言葉を思い出していた。老人は、列車を降りたところには必ず過去のお主がいるはずじゃから、もし見えなかったら近くを探すのじゃ、そして見つかったならば過去の自分と融合してお主の新しい意思で過去を変えるようにと言っていた。でも俺にはそれが簡単にできるようなことには思えなかった。そこがどこで、いったい、いつの時代に到着したのか認識することができなかったのだ。

そこはたぶん日が沈んだ後のどこかで、暗い中で遠くに街灯の明かりが、かすかに認識できる場所だった。そしてほとんど光のない闇が支配していた。

俺は蛍の火のようにかすかに見えている光のほうに行くことにして、ゆっくりと歩きながら足元や周辺を良く観察した。足の下は舗装された道路ではなくて剥き出しの土の地面のようだし、俺の周りにはあまり物体のない比較的広い空間が開いているように思えた。季節は冬のようだ。風がとても寒くて、上限の月が射すように輝いている。

俺はゆっくりと慎重に歩いた。かなりの時間を使い、遠くに見えていた光に近づくにつれて、それは点状ではなくて部屋の明かりが微かに漏れているのだということに気付いた。その時、俺はこの場所を認識した。

そうか…、ここは仙台北高の校庭なんだ。

俺は校庭の端にあるテニスコートから部室がある建屋に向かって校庭を横切ってゆっくりと歩いてきていたのだ。あの明かりの漏れる部室には、過去の俺と、俺が捨てた後輩の女の子がいるはずだった。彼女の名は『笹川香澄』、恭子のテニススクールの友達だ。俺は、本当は知っていたのかもしれない、もしかしたらここに着くかもしれないと思っていたのだ。ただ、その話を恭子にしたくなかったから、カエルの話ばっかり考えていたのだ。でも深層意識に深く存在していたのはカエルではなくて笹川香澄だった。

俺は約十年前のその部屋での出来事を思い出していた。

それは真冬の一月のことで、六時過ぎには真っ暗になっていて、最終下校時間をとっくに過ぎていたから部室には俺と笹川香澄しかいなかった。俺は高校三年で受験が直前に控えていて、もう来週からは学校に行かなくてもよい時期だった。つまり、俺と彼女が学校で話ができるのはその日ぐらいしかなかったのだ。

彼女は一年で俺たちは硬式テニス部で一緒だった。春に彼女が入部したころは、俺たちの高校の硬式テニス部は男子が十五人ほどで、女子は五人くらいしかいなかった。軟式テニス部は女子が多かったように記憶している。そして女子の人数が少ないせいで、硬式の練習は男子と女子とで合同で行っていた。ランニングの距離や体力強化のメニューは別だが、球出しをしてのストロークやボレーの練習を一緒に行っていたのだ。俺をはじめとする三年の男子は、三人しかいない一年生の女子に打ち方を指導したりしていて、俺と笹川香澄はよく一緒に練習した。

彼女と話しをするようになると、すぐに彼女が高校のすぐ近くに住んでいることを知った。俺の家は彼女の家から離れていたけれど、二人の家の中間には市立のスポーツセンターがあり、そこにはテニスコートと壁打ち練習用の壁が設置されていた。俺たちは日曜日にそこで壁打ち練習を行うようになった。彼女がたぶん自転車で二十分ぐらいでスポーツセンターに来れるから、毎週日曜日にそこでテ

ニスを教えてほしいと言ったのだ。
二人で練習をするのだから当然のように仲がよくなり、夏休みには映画にも行くようになった。俺のテニス部での活動は夏に終わったが、本格的に受験勉強をしなくてはならない秋になっても、月に一～二回はデートをした。
でも、俺はその冬の部室で彼女に別れ話をするつもりだった。

１４　御宮参り

１４　御宮参り

県立小児医療センターに問い合わせると、来週の火曜日にまず総合受付で手続きしてから循環器科行き、そこの初診受付に紹介状と保険証を出して診察の受け付けをしてくださいとのことだった。

私は祐樹に今週の土曜日が大安だから、近くの神社に沙耶香と三人でお参りに行きたいと話をした。ここから車で三十分くらいのところに、子供がすこやかに育つという神社があることを、妊婦のための赤ちゃん講習会に来ていた女性、つまり、そこで知り合った友人から聞いていたからだ。祐樹は三人で行くことに賛成してくれた。

神社は裏手に駐車場がありそこに車を停めた。その駐車場からはすぐに本殿に行く近道があったのだけれど、祐樹が表にまわって壱の鳥居から入ろうと言ったのでそちらにまわることにした。彼は濃紺で私はピンクのスーツで沙耶香は白いお包身につつまれて竹籠の中で眠っている。

壱の鳥居の左右には、たぶん花崗岩から掘られたと思われる二匹の狛犬がいて、右の狛犬の隣に岩井浅間神社と書いてある大きな石版があった。壱の鳥居をくぐり石畳を歩いていくと弐の鳥居があり正面に本殿が見えた、鳥居をくぐると本殿の横がご祈祷の受付場所で、そこで初宮参りの申し込みをした。受け付けの巫女さんが「神主さんが用意するので中でお待ちください」と言うので、私達は履物を脱いで建物の中の部屋で待つことになった。しばらくして若い神主さんが入ってきた。

「本日は、お子様の初お宮参りとのこと、大変におめでたきことでございます。この後本殿にて儀式を執り行いますが、その前に少しお話をさせていただきたいと思います。お子様は女の子で沙耶香殿とのお名前ですね」

と神主さんが言い、「はい、そうです」と祐樹が返事をした。
「当浅間神社の御神体である木花咲耶姫命（このはなのさくやひめ）様は、子供様からみれば子供を守護する神様であり、また親御様からみれば子育てを見守り助力する神様なのです。ですから、初お宮参りをされるということは、木花咲耶姫命様より大変なお力を授かることになり私どもはそれを大変に喜ばしいことと考えております。先代の神主であった私の祖父は、そのめでたい日を記念して色紙にお子様の手形と今日お参りされた方々のお名前を書いて保存し、日々神様のお力が降り注がんと祈ることを日課としておりました。先代は天寿をまっとうして一年前に亡くなりましたが、いまは私がその意思をついでいるところです。そこで、この色紙に朱肉にてお子様の手形を押されて、そこにお子様の名前、そして今日の日付けと御両親様の名前を書いてください」
と若い神主さんは言った。
その部屋の壁には、白髪に白い顎鬚を蓄えて神主の衣装を着た、たぶん先代の神主と思われる方の写真が飾られていて、その方はもうかなりの歳のように見えたが背筋がピンと伸びていて、それが柔和な表情と共に私の印象に残った。
色紙と朱肉と筆が用意されて、私達は説明されたようにそれをおこなった。小さな沙耶香の手のひらにぺたぺたと朱肉を押し付けて色を着けて色紙に押し付けた。オレンジ色をした小さな小さな手形だった。その指紋や生命線らしいスジを見ていて、涙が落ちそうになった。私はそこに筆で日付と子供の名前「坂本沙耶香」と書き、その隣に「坂本香澄」と自分の名前を書いた。それから祐樹が「坂本祐樹」と自分の名前を書いた。その後で私達はその建物と廊下で繋がっている本殿に行き、その鏡の前で初宮参りの儀式を授かった。
私は帰りの車の中で私の横で眠る沙耶香の寝顔を見て、晴れやかな気分になったと思った。
「ねえ祐ちゃん、とってもいい神社だったわね」
「ああ、なんだかとっても力を授かったような気がするんだ」

「そう、私もよ。ねえ、私ね沙耶香の手形をみて泣きそうになっちゃったの」
「そう、どうしたの」
「だって沙耶香の手の平には指紋や生命線がくっきりとしてるんだもの。手形を見たら生命線が『私は長生きよ、心配しないで』みたいにしっかりと主張してるから、そうかこの子はきっと大丈夫、神様がきっと守ってくれてるんだって思ったら涙が溢れてきたの」
と私は言った。
「そうか、僕も沙耶香は神様が守ってくれていると信じているよ」
久しぶりに祐樹の顔が生き生きとして見えた。ここしばらく毎日くよくよしていたから、きっと私の顔も久しぶりにそう見えたことだろう。

火曜日は祐樹も研究所を休んでくれて、三人で県立小児医療センターに行った。病院の総合受付はすいていたが、循環器科の受け付けは混んでいて、それに受け付けのある大きな待合スペースは人でいっぱいだった。その待合スペースの周りには、循環器科、脳神経科、消化器科、耳鼻科、皮膚科などいろいろな診療科の診察室が二十あまりあったからで、どこの診療科も混んでいたからだった。
診察を待つ沢山の赤ちゃんと、その両親や祖父母まで、多くの人たちで沢山用意されている椅子はすべていっぱいだった。循環器科も順番待ちがあり診察室に入るまでかなりの時間待つことになった。呼ばれて診察室に入ると、年配のお医者様が紹介状を読んでいた。幾つかの質問があってそれは祐樹が答えた。　それから診察台の沙耶香の胸をはだけると聴診器で診察した。
「これから、お子さんの身長と体重を測って、それから胸部のX線写真を撮ってから受け付けに提出してください。後でまた私から話がありますから、待合室で呼ばれるのをお待ちください」
先生は子供に噛んで含めるようなやさしい声で話した。直感的にこの先生が霊能者が言っていた沙耶香にとってとても大切な先生な

のだと思ったけれど、祐樹にはそこでその話はしなかった。
沙耶香の身長も体重も生まれたときとほとんど変わっていなかった。通常ならば一ケ月で１ｋｇから１．５ｋｇは体重が増えるのだが、沙耶香は１００ｇしか体重が増えていなかった。
胸部レントゲン撮影の時は声をあらんかぎりに張り上げて泣いていて、廊下で待っていても気が気ではなかったのだが、看護婦さんは「泣いて肺に空気が入るのがよいいいのですよ、だからこの子は大変協力してくれました」と言ってくれたので少し気持ちが和んだような気がした。
待合に戻り、二回目に呼ばれて診察室に入ると、先生はレントゲン写真をまじまじと見ていて、おもむろに定規をだすと何かを測りはじめた。しばらくすると、先生は机から名刺をだして祐樹に渡して自己紹介した。
「私は循環器内科の宝川といいます。内科と言いますのは、つまり私は手術はしないで投薬などの内科的処置で治療を行うという意味です。ですから、もし将来手術が必要ならば循環器外科のチームが行うことになります。それで、娘さんですが、レントゲンでみると心臓に心不全が見られますね」
私は心不全という言葉を仙台の病院でも聞いていて、なんとも良い印象を持てなかったのだが、祐樹も同じように良い印象を持っていないことを知っていた。
「ここで言う心不全とは、心臓に負荷がかかっていて、心臓が正常のものと比較して少し腫れているという意味なんですよ」
先生は噛んで含めるような優しい声で言った。
「それで、娘さんの心臓の負担を軽くするために、強心剤と利尿剤を出しますから、それを飲ませてください。粉薬だから飲ませにくいけど、薬局で薬をもらうときに薬剤師さんからやり方を聞いてください。当分早めに様子を見たいので二週間ずつで来てもらい、安定したら一ヶ月に一回診察するようになると思いますから、次回の診察の予約を受け付けでしていってください。それで、薬を飲んで

少しづつでも体重が増えていけばいいのですが、もし体重が増えていかなければ、赤ちゃんの時に手術をするということもあり得ます。まあ、あまり心配しないで様子を見ていきましょう」

宝川先生は終止優しい感じだった。

「よろしくお願いします」

と私たちは頭を下げた。

「ああ、それから、赤ちゃんがお腹を壊したり熱を出したりしたときは、近所の小児科で診てもらってください。もし、休日とか夜間に具合が悪くなった時は小児医療センターに電話をして、うちの救急外来に来るようにしてください」

と先生は言った。

待合室を出て、受付で次の診察の予約をし、薬局で薬を受け取ってかｒマンションに帰ってきた。着替えを澄ませ沙耶香に哺乳ビンで母乳を飲ませていると、祐樹が名刺を持って居間に入ってきた。

「香澄、名刺を見てごらんよ。きっとこの先生は霊能者が言っていた、沙耶香にとって、とても大切な先生なんじゃないかと思うんだ」

と祐樹は少し興奮した感じで言い、私に名刺を渡してくれた。

名刺には、小児循環器学会会長と書いてあった。祐樹はなにかの権威をありがたがるような権威主義者ではないから、そんな肩書きに左右されるような人ではないことを知っていた。たぶん、世の中に沢山いるお医者様の中で、小児循環器学会会長という専門家に巡り合えたことを不思議なことだと、そして、なんて幸せなんだろうと思ったのだろう。

「祐ちゃん、そうよ。きっとそうに違いないわ」

と私も叫んでいた。

15　帰還

15　帰還

誠一郎は土曜日の夜十一時頃家を出て行き、深夜の二時過ぎに茫然(ぼうぜん)とした表情で帰ってきた。タクシーで帰ってきたと言っていたがどこからタクシーに乗ったのかは、そのときには判らなかった。

私はウイスキーのお湯割と簡単なおつまみと漬物(つけもの)を切ってテーブルに並べた。

「ねえ、私本当に心配だったのよ。もう誠一郎が帰ってこないんじゃないかって」

「なあ、恭子これは本当に不思議な体験なんだ。俺はこれから、今日起こったことを時系列に正直に話す。それとお前に隠してきた俺の過去の話もだ。もう隠してはいけないんだと思う。すべてを正直に話して、それでお前が俺を軽蔑(けいべつ)したとしても、もう嘘をつくことはできない」

「なによ、隠してきたことって？」

誠一郎は神社についてからの様子と、神社で会った神主かもしれない不思議な老人について語りだした。

「ほら、これが過去に行くための切符、つまり、恭子の初宮参りで神社に奉納した手形の色紙だよ。その老人が探し出してきて俺に渡してくれたんだ」

そこには、一九七八年六月八日誕生、桜井恭子と書いてあり、朱肉の小さな手形が押されてあった。手形の両脇には、桜井省吾、桜井洋子と筆書きで書いてあった。「おかあさんだ」私はそれを見て涙があふれてくるのを止めることができなかった。私が初めて目にした母の面影だったからだ。そして、私は全てを悟った。あの駅のホームで出口のないトンネルの話をしてくれた奇妙な女の人は、亡くなった私の産みの母親なのだと、たぶん何かを伝えたくて私達の

前に現れたのに違いない。私はこぼれる大粒の涙をぬぐうことさえできなかった。
「なあ恭子、一年くらい前に出口のないトンネルの話をしてくれた五十歳くらいの上品な御婦人を覚えてるか？　たぶん、あの人は恭子の母親なんじゃないかと、その色紙を見て思ったんだ」
「誠ちゃんもそう思ったのね。そうよ。きっとそうよ。お母さんに違いないわ」
　私は涙声でつぶやいた。
「たぶん娘を思って、俺が過去を修正することが娘のためになることを知っていて、出てきてくれたんだよ」
「そうね。私もそういう気がするわ」
　それから誠一郎は過去を話し始めた。
「俺が着いた過去は、カエルに酷いことをした過去ではなかったんだ。カエルではなくて女性にひどい事をした過去に到着したんだ」
「女性にひどい事って？　ねえ、その女性って、もしかして香澄さんじゃないの？」
「ああ、なんで判ったんだ」
「女の勘よ。あなた達初めてテニスコートで会ったとき様子が変だったから、二人とも会う前は仙台の話をするって言っていたのに、会ったとたんお互い全然近づこうともしなかったのよ。特に誠ちゃんは、テニスコートにさえ近づこうとしなかったじゃない」
「ああ、彼女を見た瞬間に、同じ高校で一緒にテニス部だった笹川香澄だって判ったんだ。たぶん彼女も判ったと思う」
「ねえ、あなた達仙台で同じ高校のテニス部だったの？　誠ちゃんテニスなんかやったことないって言ってたじゃない」
「高校を卒業するときに、もうテニスはしない、テニスとは縁を切ろうと思っていたからだよ」
「あなたたち二人は付き合っていたのね？　彼女は恋人だったのね？」
「恋人の定義がよくわからないけど、仲のいい先輩後輩だと言えば

そうかもしれないし、付き合っていたと言えばそうかもしれない。ただ、そのとき俺には真剣に好きになった子が同じクラスにいて、その子と東京の大学に行こうって話をしていたんだ」
「じゃー、その真剣に好きな子も私達と同じ大学にいたのね？」
「いや、その子は東京にある女子大に通っていた。管理の厳しい女子学生ハイツに住んでいて、俺たちは東京で何回かデートしただけで終わってしまったんだ」
「それじゃー香澄さんとその子とで、二股をかけていたのね」
「言い訳になるけど、俺が本当に好きだったのは、東京に行く約束をした相川咲だけだったんだ」
　と誠一郎は言った。

　俺は十年前のその部室で笹川香澄とのことは終わりにしようと思っていた。
「香澄、俺はお前が好きだけど、でもいい友達っていうか、妹っていうか、そんな気持ちにしかなれないんだ。いま俺には好きな同級生の子がいて、東京でその子と付き合おうと思っている。だから、俺はもう香澄にテニスを教えられないから、自分の道を見つけてくれ」
でも、そう言う前に香澄が口を開いていた。

「小田先輩、東北大は受けないんですか？」
「東北大？　ああ、あんまり勉強もしてないし無理だから…、東京の私立をいくつかと公立は都立大を受けるつもりなんだ…、浪人しなければ東京に行くことになると思う」
「小田先輩、東京で待っててくれますよね？　私も東京の大学に行きますから」
　俺は彼女の真剣で一途な表情を見て、本当の気持ちを言えなくなった。そのとき決心したんだ。ここは適当にして、もうこっちから

は連絡しないで自然消滅にするしかないと。だから、
「ああ、判った待ってるよ。東京に行ったら絶対連絡するから」
「私、先輩のこと本当に好きなんです」
「俺も香澄が好きだ。香澄が東京に来たらだけど、そのときは一緒に暮らせればいいなと思ってる」
俺は確かにそう言ったんだ。でも、二度と連絡はしなかったし、もちろん彼女からも連絡は来なかった。住所も電話番号も伝えなかったし、香澄の性格からして家に問い合わせたりしないことを知っていたんだ。それは本当に言ってはいけないことだったんだ。香澄はたぶん何ヶ月も悶々として苦しい日々を送ったにちがいない。
俺はただ早く忘れたいだけで、事実すぐに忘れてしまったんだ。でも、それだけじゃない。香澄は部室を出る別れ際に言ったんだ。
「小田先輩、約束のキスをして…」
俺は照明のスイッチを消して彼女の唇にキスをした。そのとき、たぶん彼女にとってこれがファーストキスなんじゃないかと思っていた。

「小田先輩、東北大は受けないんですか？」
「東北大？　ああ、あんまり勉強もしてないし無理だから…、東京の私立をいくつかと公立は都立大を受けるつもりなんだ…、浪人しなければ東京に行くことになると思う」
「小田先輩、東京で待っててくれますよね？　私も東京の大学に行きますから」
「ごめん香澄」
「えっ、ごめんて…なんですか？」
「ごめん、俺は香澄を東京で待つことはできないんだ。俺には…、俺には好きな子がいるんだ。二年の頃から憧れていた子でずうーっと片思いだったんだけど、最近付き合って欲しいと告白したら、二

人で東京で付き合いたいから、彼女も東京の大学を受験するから、受験が終わってから付き合おうって返事をもらったんだ」
　それを聞いて、香澄は泣きだした。
「小田先輩、ひどいです…、好きな女の子がいるんだったら…、テニスなんか教えてくれなければよかったのに…、映画になんか誘わなければよかったのに…」
「ごめん、香澄、俺はお前が好きだけど、でも、いい後輩っていうか、妹っていうか、そんな気持ちにしかなれないんだ」
「いいの…、もう香澄って呼ばないで…、今度逢ったら笹川って呼んでください…。勉強頑張ってください。さようなら」
　香澄は部屋を飛び出していった。ドアから吹き込む寒風の音に香澄の涙に滲んだ声が重なり俺の頭の中でいつまでも反響した。

　気がつくと、俺は神社のある駅の改札出口に立っていて、時計を見ると1時20分だった。俺は神社には戻らず、駅前でタクシーを拾っていた。

16　告白

16　告白

沙耶香（さやか）は強心剤と利尿剤（りにょうざい）の粉薬（こなぐすり）を飲むのをいやがった。数滴の水で溶いてどろどろになった薬をスプーンで口に入れても、いやがってすぐに吐き出した。

赤ん坊でも苦いものを口に入れられると反射的に拒否するのだ。それは本能と呼ばれる能力なのだろうか、その能力の源泉は脳のどこかに記憶されているだろうか、それともプログラムみたいなものが刷り込まれているのだろうか、娘を見ながらそんなことを考えていたが、とにかくこの方法では薬を飲ませることはできなかった。だから、ミルクに入れて飲ませることにしたのだが、哺乳瓶（ほにゅうびん）の中には必ず薬の粉が少量残っていた。でも、まったく飲まないのに比べれば全然ましだと僕たちは考えていた。

だから薬が効果を発揮して、まったく増えなかった体重が徐々に増え始めたことがわかったときには、本当に嬉しかった。沙耶香の体重が増えはじめた頃、香澄の昔の話を聞いた。

その夜もかなり遅い時間になっていた。そのころ沙耶香はまだ一回に飲めるミルクの量は少なかったから、夜中にも何回かミルクを飲んだ。夜中にミルクを飲ませるのは大変だったから、交代でやることにしていたのだが、真夜中の一時をすぎていたその時は僕も香澄も目を覚ましていた。

六畳の和室に布団を並べて、僕と香澄の間に沙耶香が眠っていた。照明は落としていたけれど、外は隣接するマンションの照明で明るかったから、障子ごしの光で部屋は真っ暗という訳ではなかった。沙耶香は眠っていた。

「ねえ祐ちゃんもう寝たのかな？」

と香澄は小さな声でつぶやいた。

「いや、まだ起きてるよ」
と僕も小さな声で答えた。
「私、話がしたいの。もし眠かったらそのまま眠っていいのよ。でも私は話すから」
「ああ、そうするよ。でもたぶん聞けると思う」
「私、沙耶香が生まれた時とっても混乱したの。なんで心臓に欠陥のある子が生まれたんだろう。なんで私なんだろう。何か私に問題があるのかもしれないって思ってとても悲しかったわ」
「香澄にも誰にも、何も問題なんかないさ」
「そうね。でもその時はそう考えることができなかった。でも最近考えるのよ。仙台の病院の女医さん、神社の神主さん、霊能者の古河さん、小児医療センターの宝川先生、それに私達の両親や姉や妹、みんなにどれだけ支えられたのかって、沙耶香は頑張っているし私達だって必死だけど、でも、たぶん私達三人だけじゃ潰れてしまったわ。ほんの数ヶ月だけれど、ここまでこれたのは、みんなに支えられたからなのよ。だから、本当に感謝しなくちゃいけないなって思うの」
僕は香澄の手を握り締めた。
「そうだね。心の支えが無ければもっと状況は深刻になったかもしれないな」
「沙耶香が心臓に欠陥を持って生まれたのも、私達の子に生まれたのもきっと理由があるんじゃないかって思うの。私あれからいろいろな本を読んだんだけど、たぶん、私達はそれを糧に魂を成長させなくちゃいけないのよ。沙耶香は私達に成長の機会を運んでくれたじゃないかって、だから本当に沙耶香に感謝しなくちゃいけないんだわ」
「香澄の言うとおりかもしれない。この先の僕たちに何が待っているのかはわからないけど、何が起きても感謝できるのか、何が起きてもいつも前向きで明るく生きていけるのか、そんなことを試されているのかもしれないな。とっても難しいことだとは思うけど」

部屋に静けさが戻り、僕はもう香澄が眠ったのだと思った。僕も自分の体をあお向けから横向きになるように変えて眠ろうと思った。
「ねえ祐ちゃん、高校一年の時の話をしたいのよ」
「うん、前に少し聞いたことがある。テニス部の先輩を好きになって何回か映画に行ったりしてデートしたけど、香澄がクラスメートの男子に告白されてから、その先輩と別れて、その男の子と付き合うようになったんだっけ？」
僕は以前聞いたことがある話をかいつまんで説明してみた。
「ううん、その話は少しちがうの。本当は全然違うのよ。祐ちゃんに話した時は私が先輩を振ったみたいに話したけど、本当は私が振られたの。でもそうは話せなかったから」
「香澄が辛いんなら、その話はしなくたっていいんだよ。誰だって話したくない事の一つや二つはあるのが普通なんだから、辛い思い出は無理に話さなくっていいんだよ。何かされた思い出も、何かしてしまった思い出もだよ」
「ううん、違うの、聞いてほしいの。私、その先輩のことたぶん恨んでたのよ。忘れようと思って、忘れたんだと自分では思っていたけど心の底で恨んでたんだわ。だから、その先輩に偶然出会った時にひどく動揺してしまって、その時の苦しさを思い出したのよ」
「偶然にどこかで会ったのかい？　その先輩に」
「一年くらい前に、私のテニススクールの友達の小田さん夫婦と四宮さん夫婦とで中央公園のテニスコートでテニスをしたの覚えているかしら？」
「うん覚えてるよ」
「その小田恭子さんの御主人、小田誠一郎さんが高校のテニス部の先輩なのよ」
「えー、本当かい？　こんなに広い世の中なのに、そんな偶然って本当にあるんだ」
「それで、私、本当にいやな気分になってしまって、恭子さんとも付き合いたくないからテニススクールを辞めようと思っていたら、

沙耶香を妊娠したのよ。あれから会ってないけど、時々思い出すこともあったわ。小田さんは初めて真剣に好きになった男の人だったの、テニス部の先輩でラケットの握り方から教わったのよ」

それから香澄は、先輩との初恋がどう発展して、どういう結末を迎えたのかを話した。確かに最後の結末で香澄が苦しんで、大きな絶望に打ちのめされたことが伝わった。

「私、男の人とデートなんかするの初めてだったから完全に舞い上がってしまっていて、高校を卒業したら小田さんと同じ東京の大学に行って、大学を卒業するころには小田さんと結婚できるかもしれないなんて勝手に夢見たりしていたのよ。だから、音信不通になって振られたことを理解したときには、生きる希望を失うくらい落ち込んだの。それから彼を恨んだし、そんな自分も消してしまいたいほどいやだったの」

香澄の声は涙に滲んでいた。

「香澄の辛かった気持ちはよく判る。でも恋愛にはよくあることだよ…、自分が傷ついたり、相手を傷つけたりするんだ。それは避けられないことで、恋愛をするってそういうことなんだと思う」

僕は香澄を抱きしめた。

「でも、沙耶香が生まれて、心臓が悪いって聞いたときに、私が…、私が昔の嫌なことを思い出して妊娠したから…、私のせいじゃないかって…、自分を責めたのよ」

香澄は僕の胸に顔をうずめて、前よりも大きな声で肩を震わせて泣いた。

「ねえ香澄、君が誰かを恨む感情を持っていたからって、神様がその罰として沙耶香の心臓に孔をあけるなんて僕には信じられない。それに、沙耶香は君だけの子供ではなくて僕の子供でもあるんだから、つらい出来事の原因は僕にあるのかもしれないじゃないか。人生は長いし、これからだって苦しいことは沢山おこるだろう。その時に、あれが原因だった、これが原因かもしれないって悩むのはよくないよ」

「でも、その恨みの感情や辛かった思い出を、いつまでも持ち続けることは良くないことなのよ。沙耶香が生まれてから本当にいろいろなことを考えたわ。それに、沙耶香のことで、本当にいろいろな人から勇気や希望を貰ったの。でも私には誰にもそんな希望を与えることはできないから…、今の私にできることは恨みの感情や辛かった思い出を、心の中から消し去ることだけなんじゃないかって思ったのよ」

「香澄はいつも僕に生きる力と希望の光を与えてくれている」

「私、それが本当にできるのか判らなかったけど、最近頭の中で嫌な思い出を全部思い出した後で、『私は全てを許すことができるわ』って心の中で強く念じたのよ。そうしたら本当に心が軽くなって晴れやかな気分になったの。それから、今は小田さんにも感謝できるような気がするの。私、高校生になったころは自分の進路や自分のやりたいことってよく判らなかった。得意な科目も苦手な科目も特になかったの。ただ、小田さんが文系だから、私も文系志望で小田さんを追いかけていこうなんて感じだったのよ。だから、二年生になって振られたことがはっきりした時、私、文系から最も離れたものを、つまり小田さんから最も離れたものを志望しようって決意して、物理学科に行こうって決めたのよ。ずいぶん消極的な理由での決断だったと思うけど、でも、そのおかげで祐ちゃんに出会えたんじゃないかって、最近そう思えることができるようになったわ」

僕には香澄が到達した心境を理解できたのかは判らなかったけれど、香澄の声は沙耶香が生まれた頃の自信がないようなオドオドした感じがなくて、生きる希望に満ち溢れているように感じられた。

沙耶香と僕たちに与えられた試練でさえ、全てに感謝をすれば乗り越えられるのだと決意をしているように見えた。

17　遺言

17　遺言

誠一郎が戻っていった過去の話を聞いた。もしかしたらとは思っていたのだが、誠一郎と香澄さんが高校時代に付き合っていた事を知ったのはショックだった。それに誠一郎が香澄さんを一方的に傷つけたこともだ。でも私は目の前で茫然としている誠一郎を力づけなければと思っていた。

「誠ちゃんしっかりして、あなたが一番行きたくなかった辛い過去と向き合って修正したんでしょう。それでいいのよ。それで」

「ああ、どっちも酷いけど前よりはずーっといいよ。嘘をついていないから」

誠一郎の言葉には生気が無かった。

「恋愛だから傷ついたり傷つけたりするのよ。でも別れる時だって誠意は大切だわ。それは自分を隠さずに嘘をつかないってことしかないのかも…、ねえ、誠一郎はそういうふうに過去を修正したのよ。もうそのことは忘れましょう。私はあなたを責めたりはしないから」

「恭子、有難う…、その言葉が一番聞きたかったのかもしれない」

それから誠一郎と一つの布団で抱き合うようにして眠った。誠一郎と私は同い年で同学年だからお互い言いたいことは遠慮無く言ったし、喧嘩もよくした。でも、いま誠一郎は幼い子供のように私の腕の中で眠っている。彼もきっと過去のトラウマから救われたのだと思った。

「お母さん有難う。私たちきっと困難を乗り越えられるわ。これできっと子供を授かることができる。お母さん、それまで見守っていてね」

その出来事の後しばらくして誠一郎が元気になった頃に、私達は

不妊治療の先生を訪ねた。私たちにはきっと何かが変わったんじゃないかとの期待があって、お互い言葉には出さなかったけれども、それは精子の異常が少なくなっているはずだとの思いだった。でも検査の結果は前と変わってはいなかった。カウンセリング室で先生からの説明が一通り終わると、誠一郎が質問を切り出した。

「先生、非配偶者間人工受精について教えてください」

「いいですか。あなたの精子は奇形率が高いけれど正常なものもある。こういう精子の異常にはいくつかの原因が考えられるから、もっと精密な検査を行って対応を考える必要があるんです。例えば、あなたのストレスが少なくなるだけでも状況が変化する可能性もあるんですよ。それに正常精子を取り出して体外受精ということも十分可能だと思います。ですから、まだ非配偶者間人工受精を考えるのは早いと思いますよ。でも、いまから、ご夫婦でよく話し合っておくことは大切ですから、お話はしましょう」

先生は慎重な言い回しで話をした。

「精子に問題があって妊娠できない場合、いろいろと手を尽くしても妊娠や夫婦間人工授精もうまくいかなくて、でもどうしてもお子さんが欲しいご夫婦には、非配偶者間人工受精があります。これは精子バンクに保存されている精子を使って行うのですが、御主人の血液型などと整合した精子が選ばれます。生まれてきたお子さんは母親とは血が繋がっていますが、父親とは血が繋がっていません。日本でも非配偶者間人工受精で毎年多くのお子さんが生まれていますが、これは里子をもらうよりは片親と血が繋がっているほうがいいとの判断が働くからなんです。でもご夫婦で本当に真剣に話し合わなければなりません。ご夫婦に子供を育てきる覚悟がなければなりません。それともう一つの深刻な問題は、子供への告知です。子供には親を知る権利があるのですが、多くのご夫婦がそのことで大きな苦しみを味わいます。そして子供さんも大きな苦しみに直面するかもしれません。隠さないで話してそれを知った時の苦しみ、隠していたことを知ったときの苦しみ、そういう事が将来発生するこ

とを理解した上でご夫婦で話し合ってください」
「先生、お話有難うございます。二人でよく話し合ってみます」
病院を後にした後、私達はその話題について話さなかった。

私と誠一郎と看護婦は長い廊下を歩いていた。先生が保存している精子を見せてくれると言うので看護婦に案内されていくのだ。
なんでも精子は液体窒素とかいう中で　マイナス１９６℃で冷凍保存してあるらしい。マイナス１９６℃はどこかの缶チューハイに書いてあったような気がしたが、精子と缶チューハイにどんな関係があるのかは判らなかった。ただ、その廊下には私達三人以外には誰もいなくって、靴の音だけが静寂の中で反響していた。
長い廊下の両側には、臨床検査室という表示がずーっと並んでいたのだが、やがてそれは子宮標本室とか精巣標本室とかいうオドロオドロしい名前の表示に変わっていた。看護婦は「あそこを曲がればすぐですよ」と言った。
そこを曲がると二十人くらいの人が列を作って並んでいた。その中の何人かは、会社やマンションで会ったことのある、知っている顔だった。「何でこんなところに居るのよ」と思ったけれど黙っていた。並んでいるといつのまのか全員病院のガウンのようなものに着替えて立っていることに気付いた。そのガウンの下には何も着ていなかった。なんでと思った瞬間に列の前の扉が開いて列が吸い込まれて行く。私達も最後尾で列に続いた。
部屋の中は薄暗くて奇妙なものがたくさん並んでいるようだったが、それが何かは判らなかった。大勢の黒い服を着たスタッフがいて、私達を一人ずつにした。声は聞こえなかったが、私の横のスタッフがその台の上に腹ばいになって寝ろと言ったように聞こえた。私が冷たい台の上に腹ばいになると、首に何かがはめられた。その瞬間にそれが何かを理解した。それはギロチン台だった。
周りを見まわすと暗闇に目がなれたのか、みんながギロチン台に首を固定されているのが見えた。私の隣のギロチン台には誠一郎が

いた。「助けてー」と声を上げたが声は出なかった。恐怖で脂汗が流れ落ちる。もう一度「助けてー」と声なき声で叫ぶと、何かが現れた。それは母だと思った、あの駅のホームであった婦人だったからだ。「お母さん、助けてー、ねえ、助けてー」母は誠一郎の首枷をはずして、私のところにきた。でも私の首枷は外れなかった。「ねえ、どうしたの、早く外して…、早くはずしてよー」でもどうしても外れなかった。やがて時間を告げる不気味なドラムの音が鳴り響く。「あぁー、お母さん、早くして、もうだめよ、早くー…」見ると、母の顔はとても悲しげで、もう駄目よと首を左右に振っていた。

夢からはそこで覚めた。私は本当に気持ちの悪い汗をかいていて呼吸も荒く心拍数も早くなっていた。横に誠一郎が寝ていた。

「誠ちゃん、ねえ起きて、起きてよ。私本当に嫌な夢を見たのよ。いままで見た夢で一番いやな気分なのよ」

私は誠一郎を起こして、今見た夢の話をした。

「薄気味の悪い夢だなー」

と誠一郎は言った。

「ねえ、私、過去に行かなくちゃいけないんだわ。お母さんはそれを言いにきたのよ。誠一郎の首枷が外れて、私のがどうしても外れなかったのは私がまだ過去と向き合っていないからなんだわ。この夢はお母さんの遺言なんだわ」

「遺言？　遺言てっ？」

「お母さんのメッセージよ。あの駅で『出口のないトンネル』の話をしに、私たちに会いに来たのは、誠ちゃんじゃなくて、私に過去へ行けっていうメッセージだったのよ。、つまり、私への母の遺言てことよ」

「なあ、恭子、お前が向き合わなければいけない過去って何なんだよ？」

「それは私が一番よく知っているわ。でも、それは言えないの。絶

対に言えないのよ」
「俺だって、酷いカエルへの仕打ちや、笹川香澄への酷い仕打ちだって話したじゃないか。話せよ。俺は何を聞いたって平気だよ」
「だめよ。だめ。聞かないで。過去は清算するわ。でも、言えないから聞かないで」
「わかったよ」
私は誠一郎が神社の老人から聞いた話をもう一度聞いた。今家にある手形で私は過去に行けること、私が行くときには神社に行く必要はなくて、一人で深夜の一時に神社のある駅の一番ホームで待てばよいこと、手形を持っていればたぶん人から認識されることがないこと、なんかである。私は誠一郎と同じ土曜日の夜に行くことを決意した。

全て誠一郎から聞いた通りだった。深夜の一時に、その列車は音もなくホームに入ってきて停車した。手動ドアを開けて乗りこむと、照明は煌々と輝いていて、音もなくすべるように動き出した。もうまもなく、出口のないトンネルだった。
トンネル内での様子も聞いた通りだ。照明は全て落ちて真っ暗になり、自分の過去の映像がトンネルの外に現れるけど、それは早いからよく判らないと聞いていた。誠一郎は気がついたら止まっていて扉を開いたら見覚えのない場所だったと言っていたが、それは予測していた過去と到着した過去が異なっていたからだ。でも私は知っていた、私の到着する過去はそこしかないと思っていた。
音もなく列車が止まり、私は手動の扉を恐る恐る開いた。そこは夜のディズニーランドで予測したとおりだった。たぶん時間は九時を過ぎているはずで、人はかなり少なくなってきていた。
列車も私も誰にも見えないのだろう。何人かのカップルや家族ずれが私の横を通り過ぎたが、列車が消えていったことや私の存在に気が付いた人はいなかった。私の目には闇の中にライトアップされて浮かびだされている大きな赤茶色の岩山が見えている。たぶん左

手の方角にしばらく歩けば、トムソーヤ島に行くためのいかだ乗り場があるはずだ。トムソーヤ島に移動するいかだは日暮れと共に停止するので、その時間のいかだ乗り場は薄暗くて閑散としていた。そしてそこには私と誠一郎がいるはずだった。三年前の春、この時間のそこで私は誠一郎にプロポーズされたのだ。そしてそれこそが私が修正しなければならない過去だった。

「ねえ恭子、この時間だとトムソーヤ島に行くいかだ乗り場には誰もいない。このディズニーランドにこんなに静かな空間が存在するなんて信じられないことだと思わないか」

と誠一郎は不思議そうな顔をして言った。

「ええ、そうね。でも何でこんな誰もいない暗いところに居なくちゃなんないのよ。早く行きましょうよ」

「待って、恭子。大事な話があるんだ。ここで俺の話を聞いて欲しい」

「えっ、何よ」

「なあ、俺たちも社会人になって二年たった。たぶん、社会という大海に対してはこのいかだの操縦を覚えたくらいのレベルだろう。でも、このいかだで出発しなければならないんだ。そして知らない土地に流れ着いたとしても、そこで道なき道を切り開いて進まなければならないだろう。俺は人生ってのはそういうものだと思ってるんだ。俺は恭子と二人でいかだを出発させたいんだ。二人で未来を切り開いていきたいんだ。だから、頼む。俺に付いて来て欲しい」

「いかだ乗り場でのプロポーズって変わってるわね。私が想像していた場所とは全然違うけど、プロポーズして欲しかった人は一致してるから許してあげる」

「それって、俺と結婚するって意味だよな？」

「馬鹿ねー、そうに決まってるわよ」

「あーそうか。そうだよな。俺本当に嬉しいよ。俺は恭子に嘘も隠

し事もしないって誓うよ。一生お前だけを愛するし、きっとお前を幸せにしてみせる。だから、お前も俺に嘘や隠し事はしないって言ってくれ」
「あたりまえよ。私、誠ちゃんに嘘や隠し事なんてしたことないし、これからもずーっとないからね」
「なあ、秋頃に結婚式を挙げるように計画しないか」
「ちょっと急な感じがするけど…、そうね。それでいきましょう」

でも、隠し事がないなんて嘘だった。
私はそのとき妊娠していたのだ。胎児の父親が誠一郎ではないことは私自身が一番よく知っていた。約三ヶ月前に会社の同僚の女の子から合コンに誘われて、渋谷で鍋パーティーに参加した。そのときに日本酒を飲みすぎてしたたかに酔った私は、合コンで知り合ったばかりの男性に送ってもらうことになり、そのまま二人で渋谷のラブホテルに一泊したのだ。私はその男性が誰なのかも良く覚えていなかった。朝起きると二日酔いで気分は最悪だったけれど、昨夜そこで誰かを受け入れたことは間違いなく覚えていた。ホテルの料金は支払い済みで、私は外に出てタクシーを拾ってワンルームマンションに戻ってきた。頭痛と吐き気、馬鹿なことをしたという嫌悪感で気分は最悪だった。それからしばらくして、生理が止まっていることに気づいた。薬局で妊娠検査薬を買ってきて検査したら、やはり妊娠していた。堕胎の決心はすぐについたけれど、実際に私が誠一郎に内緒で子供を降ろしたのは、誠一郎にプロポーズされた一週間後だった。
私は混乱していた。一体何をどう修正すればいいのだろうか。誠一郎に私が妊娠していることを告げればいいのだろうか。良く知らない男とベットで一夜を過ごしたことを話せばいいのだろうか。その後で、どんな結末が待っているのだろう。誠一郎は怒るだろうか、きっとひどい女だと罵るだろう。彼はプロポーズをしないだろうし、結婚も無くなるだろう。私の目前には闇の中にライトアップされて

浮かびだされている大きな岩山が見えている。そして左手の方角にしばらく歩けば、トムソーヤ島に行くためのいかだ乗り場があるはずだ。私の足は自分の意思に反してそこに向かっていく。そして誠一郎と自分自身の存在を認識した。

「なあ、俺たちも社会人になって二年たった。たぶん、社会という大海に対してはこのいかだの操縦を覚えたくらいのレベルだろう。でも、このいかだで出発しなければならないんだ。そして知らない土地に流れ着いたとしても、そこで道なき道を切り開いて進まなければならないだろう。俺は人生ってのはそういうものだと思ってるんだ。俺は恭子と二人でいかだを出発させたいんだ。二人で未来を切り開いていきたいんだ。だから、頼む。俺に付いて来て欲しい」

「誠ちゃん、ありがとう。あなたからのプロポーズ本当に嬉しいわ。私本当にうれしいの。でも、プロポーズに「はい」って返事できないの。私誠ちゃんを裏切ってしまったのよ」

「裏切るって？」

『おかあさん、助けて、私に力をさずけてよ。ねえ…、おかあさん…』

「ごめん誠ちゃん、今は言えないのよ」

「そうか。プロポーズは…、結婚は断られたか。まあ、それはそれでしかたがないさ」

『ねえ、おかあさん私どうすればいいの？　ねえ…、教えてよ…、おかあさん…』

『恭子、恭子…、しっかりしなさい、恭子…』

「ちがうの…、私その言葉をずーっと待っていたの、信じて。でも、誠ちゃんを裏切ってしまったのよ…、私…、妊娠しているの…、ごめんなさい誠ちゃん…、私が悪いのよ…、三ヶ月前の合コンで私酔いつぶれてしまって…、よく知らない男とホテルで一泊したのよ…」

「本当に……本当なのか？…、恭子」

「ごめんなさい。合コンなんか行かなければよかったのよ。ごめんなさい…。自分を失うほどお酒を飲むなんて…、馬鹿だったのよ…」
私は泣いていた。二人の間には言葉はなく、私のすすり泣く音だけが、場違いなディズニーランドの夜空に吸い込まれていった。どれだけ時間がたったのかさえわからなくなっていた。
「恭子…、恭子、聞いてるのか？　なあ、今日は本当にきれいな上弦の月が見えている。ほら見てごらん」
誠一郎が指差した方向に見えた月は涙にかすんで満月のように見えた。
「なあ、今日の俺からのプロポーズは忘れてくれ。そして、二人で何ヶ月か経ったらまたこの場所に来よう。同じ上弦の月を見ながら俺は自分の決意をもう一度話すつもりだ。だから、お前の返事はそのときに聞きたいんだ。なあ、恭子、それでいいだろう」
誠一郎は私を抱きしめた。
「誠ちゃん…ごめん、ごめんなさい…ごめんなさい…」
「泣いてばかりいないで、それでいいって言えよ」
「それでいいって？…、それでいいの？…、誠ちゃん…本当にそれでいいの？　……　誠ちゃん、お願い、また私を連れてきて…」
「ああ、約束だからな」

気がつくと、私は神社のある駅の改札出口に立っていて、時計を見ると午前一時二十分だった。私が過去に戻っていたのは間違いないと思った。泣いた後の目は腫れぼったく化粧も崩れていて、着ていたブラウスの胸は涙の跡で濡れていたからだ。

１８　遍歴する未来

１８　遍歴する未来

沙耶香の体重は薬を飲みはじめてから除々に増えていった。もちろん同月齢の標準には届かなかったが、母子手帳に掲載されている体重曲線の最下線部にはなんとか届くようになっていた。体が軽いせいか、歩くのが早くて生後九ヶ月で歩き始めた。

香澄は懸命に子育てをしていた。そして、小児医療センターに行くようになって三年目になり、宝川先生は退職されて後任の先生に代わっていた。

「宝川先生は3月で退職されまして、それで、私が後任として担当医になりました島田です。沙耶香さん、半年ぶりの定期検査ですね」

「はい、坂本といいます。よろしくお願いします」

「では、聴診器をあてますので胸を出してください」

沙耶香は椅子にすわり、香澄が沙耶香の服の前を開けた。

「あれっ…、心臓の音に雑音が無くて澄んだ音ですよ。たぶん…、孔が完全に塞がっていると思いますが…」

聴診器を沙耶香の胸にあて、難しい顔をしながら心音を聞いていた先生は、少し上ずったような声で言った。

「本当ですか？　先生。前回の検診では、そろそろ手術をする時期について検討することになるからって言われていたんですよ」

「確かにそのようですね。宝川先生からの引き継ぎ事項にも、孔が塞がる可能性は低いから、手術にむけて御家族と話し合うようにって書いてありますよ。でも、今の感じでは間違いないです。塞がっていると思いますよ。でも、一年後にもう一回来て下さい。その時に最終確認をしましょう」

僕等の喜びは大きかった。もう、何回ここに来たのだろうか。

沙耶香は母親を認識できるようになると、レントゲン検査でＸ線

室に一人で連れて行かれるときに狂ったように泣き叫んだ。一歳になった直後の超音波検査の時には、体の動きを止めるために睡眠薬を飲まされて、半ば意識がない状況下で、半狂乱に泣き叫びながら必死に香澄の顔と手を追いつづけた。僕はその時母親から引き離されるということは、こんなにも残酷なことなのかと目頭が熱くなったのだ。これまでのいろいろな事が走馬灯のようによみがえった。

沙耶香が一歳半になるころだっただろうか、夜帰宅すると39℃の高熱を出していた。毎日、風邪をひかせないように、虫歯にしないようにと注意していたはずだった。

「どうしたんだろう」と僕が呟くと、香澄が「私のせいよ」とぽつりと言った。

「私のせいって、どうしたの？」

「最近、沙耶香を公園で遊ばせてるんだけど、公園には小さな子が沢山きていて風邪をひいてる子もいるのよ」

「何故、なんでそんな公園に行くんだ？　風邪をひかせないようにって、医者から言われてるじゃないか」

僕は声を荒げていた。

「ねえ聞いて…、沙耶香は部屋に隔離されていて楽しいかしら？沙耶香は公園で遊ぶのが好きなのよ。お友達もできて、いつも砂場で遊んでいるの」

「でも、風邪をひいたりしたら心臓に悪いだろう」

「最初は恐る恐る行ってたのよ。でも、砂場で遊んでいる沙耶香を見ていると、とっても楽しそうな沙耶香を見ていると、部屋に隔離していることがいいことのように思えなくって…、もし風邪をひいて、それが原因で死んでしまったとしても…、それはそれでしかたがないんじゃないかって…、最近そんなふうに考えているのよ。もちろん、できる限りは注意をするわ。でも、そういうふうに考えるのって駄目なのかしら」

「そうか。香澄がそう考えているんなら、僕もどうしたらいいのか考えてみるよ」

結局、沙耶香は天気のよい日には毎日公園で遊んできた。でも熱を出して小児医療センターの救急外来にいったのは、その時を含めて二回だけだった。

「祐ちゃん、不思議ね。霊能者の古河さんの言ってたこと、ほとんど当たっていたのに、孔が自然に塞がることだけは外れたのよ」

香澄の声は落ち着いていたが、その表情は安堵に満ち溢れていた。

「ああ、不思議だな。たぶん、未来は確定しているわけじゃあないんだよ。ほら、大学の時に勉強した不確定性原理、あの厳格な量子力学をもってしても未来は揺らいでいるとしか言えないんだ。それは、どこに到着するかわからない、風の中で揉まれる小舟のようなものかもしれない。でも、古河さんは予言が外れたことを本当に喜んでくれると思うんだ。あの人はそういう人だと思う」

「そうね」

その病院の帰りに、僕と香澄と沙耶香で岩井浅間神社にお参りに行った。沙耶香の心臓の孔が塞がったことの報告とお礼をしたいと思ったからだ。僕は沙耶香を抱いて壱の鳥居をくぐった。

「パパ、あたし、ここのカミサマのところきたことあるよ」

「そうだね。お宮参りでパパとママと三人で来たんだよ。沙耶香のことをいつも見守ってくれている神様なんだよ」

「あたしね。カミサマとおはなししたの」

「そうか、どんなことを話したの？」

「うーん、よくわからない。あたし、ママと歩きたいの」

沙耶香はきっと本当に話しをしたのだ。幼い子供は霊的な力を残しているから、大人には見えなくなったり聞こえなくなったりした不思議な存在と接触することができるのだろう。そんなことを考えながら、弐の鳥居をくぐった。僕の前を香澄と沙耶香が手を繋いで歩いていた。

19　母

19　母

息子の洋一郎が三歳になる前に、私と誠一郎と三人で私の産みの母親の実家に行くことにした。

私は、息子が生まれる四ヶ月前に会社を退職した。会社の同僚や先輩・後輩は、皆育児休職制度を利用して会社に戻ってくればいいのにと言ってくれたが、誠一郎だけは言わなかった。私が母親というものを思う存分体験したいことを理解していたからだ。

でも母親になるということは、とても大変なことだった。息子が生まれてからは毎日が戦争のようなもので子育てに時間を取られてしまい、母の実家を訪問したいとの希望を叶えるのは伸び伸びになってしまった。父から母の実家の住所と地図を書いてもらい、私は母の実家を継いでいる叔父さんに手紙を出した。そして、いつでも来ていいからとの返事を貰った後で、私達は春の暖かい土曜日に車で行くことにした。

母の実家は富士山の良く見える静岡県の富士宮市にあった。その日の高速はすいていて東名のインターを降りてからの道も難しくはなかったから、家を出発してから3時間くらいで到着した。ちょうど午後の1時ころだった。

「こんにちはー、小田恭子です」

「こんにちは、初めまして小田誠一郎です」

「あぁー、よく来たねー。あんたのお母さんの弟の安藤洋介だよ。恭子ちゃんは覚えとらんだろーけど、一～二歳くらいの頃に何回か会ったことがあるよ。でも、もう、どっかで会っても全然判らんなー、さあさあ、皆さんこっちへ上がりなさい」

叔父さんは、とても気さくな感じの人だった。私達は居間に通された後で叔母さんを紹介されて挨拶をした。

「もうすぐ三歳になる息子の洋一郎です。母の洋の字を貰って、洋一郎ってつけたんですよ」
「そうかそうか。家の親爺が、うん、恭子ちゃんの爺さんになる俺の親爺だよ。それが、もう五年前に亡くなったんだけど、洋蔵っていう名前でね。姉さんと俺に洋の字を入れて洋子と洋介になったんだ。その爺さんも、恭子ちゃんのことは気にかけていたんだけど、こっちからは連絡できんて言うてね。そうか、洋一郎か、爺さんも姉さんもきっと喜んでいるだろう」
「そのことで今日伺ったんです。私、お母さんの顔を覚えていないし、お母さんの写真も見たことないんです。その話を父にしたら、こちらにあるかもしれないって、だから、もし写真があったら見せていただきたくて」
「ああ、手紙を貰ってから姉さんの写真を新しいアルバムに整理したから、まあ、お茶でも飲んで待っててよ。今持ってくるから」
叔父さんが持ってきたアルバムは、たぶん最近買ったと思われるような綺麗なものだったが、中を開くと白黒と色が少し抜けてくすんだカラー写真で構成されていた。最初のほうは、母が小さいころの写真で、ページをめくると小学校、中学、高校、短大とつづいていた。
「これ大学のころのお母さんかな？　恭子とは全体の印象が違うけど、お母さんて、ずいぶん細っそりとして美人だね」
誠一郎が食い入る様に見つめながら言った。さらにめくっていくと父と結婚したころの写真があった。
「あっ、誠ちゃん…、これ」
「ああ、これはきっとお宮参りの写真だよ。鳥居の横の石に岩井浅間神社って書いてある」
私の写っている写真はその一枚だけだった。そこに父と母と母に抱かれた白いお包みに包まれた私がいた。父は紺のスーツで母はピンクのスーツだった。そのピンク色は、確かにあのホームで出会った婦人が着ていたピンクのスカートと同じ色に違いなかった。

「お母さん…、やっぱりお母さんだったのね…、私を守ってくれたのね。有難う」
私の目に涙があふれたが、必死にこらえた。どうしても写真に涙を落としたくなかったからだ。もう、母に心配をかけたくない。天国で安心して見ていられるように暮らしていこうと思ったからだ。
「なあ、恭子ちゃん。このアルバムは君が持っていなさい」
「えー、でもいいんですか」
「当たり前だよ。そのために整理したんだから」
「本当に、有難うございます」
叔父さんから母の子供のころの話を聞いたあと、夕方母の実家を後にした。車の後ろの席でチャイルドシートに座った洋一郎とアルバムを見ながら話をした。
「ママ、これーだーれ？」
「これはね。洋一郎のママのママ、つまり洋一郎のおばあちゃんなのよ。そして私の大切なお母さんなの」
「ママのママはどこにいるの？」
「ママのママはねー。きっとお空に居て洋一郎を見ているわ。それから、この前お参りした神社覚えてるかな？　洋一郎が御宮参りをした神社、きっとあそこに来ているかもしれないわね。ほら、この神社よ」
私は父と母と母に抱かれた白いお包みに包まれた私が写っている岩井浅間神社の写真を誇らしげに息子に見せた。
窓の外には夕日に赤くそまった富士山が輝いていた。

20　交差する光たち

20.　交差する光たち

私と恭子は土曜日朝一番のテニススクールの中級に復帰した。二人で一緒に復帰する約束をしていたからだ。

「ねえ香澄、本当に久しぶりね。ここでお茶にしましょうよ」

と恭子は嬉しそうに言った。

前にここに来たのは一体いつだったのだろう？　前は二人だったのに、今日は子供達を連れている。沙耶香は四歳で、洋一郎は三歳になった。スクールの託児施設が三歳から受け入れてくれるので、やっと二人でのテニススクールへの復帰が叶ったのだ。

「久しぶりのテニススクール、なんだかとっても疲れたわ」

「そうね。前に打ててたフォアハンドも、もうボロボロだったし、また一から出直しって感じね」

「ねえ、四人でここに居るのって、何だか不思議な気がしない。私たちには、いろいろなことがあったもの」

と私は言った。

「そうね。ずいぶん不思議なことに遭遇したわよね、私達」

恭子が微笑みながら言った。

私たちはお互いが体験した不思議な出来事を知っている。私が彼女の御主人誠一郎さんと高校時代に付き合っていたこともその中の一部だ。恭子の家に洋一郎が生まれてから、私たち二家族は、私のマンションや恭子さんのマンションで何回か食事会や飲み会を開いた。誠一郎さんは私に真剣に謝ってくれたし、私は誠一郎さんのおかげで今の主人と知り合えたから感謝していると言うことができた。私たちはもう誰もそのことを蒸し返したりはしなかった。私たちは何回も会って話をするうちに、お互いが遭遇した不思議な体験を話し、そして聞いてきた。

「ねえ恭ちゃん、前に二人だけで来てた頃とはずいぶん違うような気がするわ」
と私は言った。
「そうね。沙耶香ちゃんと洋一郎がいるけど、もう一つ違うことがあるわよ」
「もう一つ？」
「そう、香澄が私を恭子さんじゃなくて、恭子って呼ぶようになったことよ」
私は沙耶香を抱き、恭子は洋一郎を抱いている。朝の光りの中で私達四人の笑顔が交差していた。

２０　交差する光たち（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございます。
面白かったでしょうか。
もし、評価をいただければ今後の創作活動の励みになりますので、
評価のほうも、よろしくお願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1286m/

交差する光たち

2010年10月8日12時23分発行